とある学園でのことです。

dr.harry

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある学園でのことです。

【Ｎコード】
Ｎ５９０３Ｚ

【作者名】
ｄｒ．ｈａｒｒｙ

【あらすじ】
丘の上に立つ学園では今日も事件が起こります。
【谷間のゆり。丘の上の学園】二人の少女は教室で出会います。「あなたに友達はいるの？」教室で本を読む少女に、もう一人が話しかけました。その場面から始まるこの物語は「孤独（ひとり）」とは何かという軸で展開していきます。
【ライラック。翠の中庭。】顔もいい、スポーツもできる、頭もそこそこいい、でも性格にちょっと問題がある。ツンツン髪の少年ライタは女の子に恋をします。案の定うまくいかない告白までの道

のりを友達と一緒に成就させようと奔走します。少しギャグテイストなこの話は「恋（ふたり）」を軸に進みます。

プロローグ（1）

谷間のゆり。丘の上の学園

学校とは、子どもたちに知識をつけさせると共に「学校」という限られた空間で「社会」や「世界」をおしえるコミニュティー。そこで生活する子どもたちはひどく受動的でいて能動的。話しかけることもあれば話しかけることもある。友人を作ろうとすることもあれば、そんなことしなくたっていつの間にか横にいることだってある。子どもたちはたくさんの影響を受け、たくさん試してすこしずつ大人になっていく。

プロローグ（1）（後書き）

つたない文章ですが、少しずつ更新していきますのでお付き合いください。感想、評価などいただけたらうれしいです。

第一幕　リコリス

とある学園でのことです。

今日もひとりの女の子が自分の教室の自分の机で本を読んでいました。背丈は九歳という年齢にしてはすこし低めで、半袖で過ごせるような春真っ盛りの陽気であるというのに、制服の上からカーディガンを羽織っています。青白く透き通ってしまいそうな肌は女の子があまり丈夫でないことを物語っています。緩やかな癖のある長い髪には、鮮やかな紫色のレースのリボンがあしらわれていました。

丘の上に立つ学園の窓からは、すぐそばにある丈の低い茂みと遠くには海が見ます。女の子は窓際の日当たりのいい特等席で読書を楽しんでいました。左手にある窓を１０センチほど開け放ち、燻る紅茶の香りを楽しむかのようにして春の暖かな陽気を浴びながら。

女の子は、穏やかな春の風が髪をゆらして頬をくすぐるたびに、外に目をやって緑色に光るしげみが揺れるのを眺めました。そして、優しい目をしてにこりと微笑みます。

そんな彼女のもとにある集団が近づいてきました。どうやら同じ学年の女の子たちのようです。中には同じクラスの女の子もいます。

「ねえ、よろしいかしら」

女の子たちの中の一番えらそうにしてる娘が、本を読む女の子に話しかけます。本を読む女の子の知らない別のクラスの娘でした。くるくると巻いた豊かな髪は濡れたようにしなやかで、顔は陶でできた人形のように美しいです。いかにもお嬢様風のその女の子はほかの娘たちを従えるようにして胸をぴっとはって本を読む女の子の前に立ちます。

「……ん？」

本を読む女の子は偉そうな女の子の顔をじっと見た後、首を傾げました。本を読む女の子はえらそうな女の子のことをみて、かわいい娘だなと思いました。きれいな髪。それを惹きたてる赤いリボン。

とのった顔立ち。背丈はわたしと同じくらい。きっとクラスの中でも中心的な娘なんだろうなと本を読む女の子は思います。でも・・・・、なんでわたしに話しかけたんだろう？同時にそうも思いました。

えらそうな女の子はそよぐ風に乱れる髪を片手で整えながら話を続けます。

「あなた、いつもこの時間ひとりね？本ばっかり読んで。友達はどこにいらっしゃりますの？」

容姿に似合わない大人びた態度で、嘲笑するかのようにそう言いました。少女の目はすでに、返ってくる答えとそれに対しての言葉が映っているかのようでした。

本を読む女の子は開いたままの本をゆびさして、

「ここ」

そして窓の外で揺れる茂みをさして、

「と、あそこ」

と、ぽつりぽつりと答えました。唐突に自己紹介をさせられて、本を読む女の子はえらそうな女の子が何を云いたいのかわかりません。

えらそうな女の子は絵本で読むお嬢様みたいに高らかに笑いました。

「ふふふ。本が友達なんておかしな娘。どうせ友達なんていないんでしょ？あなたいつもひとりだものね。さびしくないの？友達がいないから本とおともだち？笑っちゃうわ。ものとなんて友達になれるはずないじゃないですの。本はしゃべれないし、一緒に遊んでもくれないんですのよ」

えらそうな女の子は、まくし立てるようにしてそういったあと、

「でも、わたしたちがいっしょにあそんであげてもよくってよ？」

そういって本を読む女の子にゆっくりとその白くて小さな手を差し伸べました。それはまるで、捨てられた子猫を拾うよい家柄のお嬢様のように見えて慈悲深く。それでいて自己満足にあふれていま

した。
　本を読む女の子はじっとその手を見つめると、すこし間を置いてまた本に目を移します。
「べつにいい」
「なっ！　」
　えらそうな女の子は眉根をよせて、信じられないといったふうな顔をします。
「なんで！？なんでですの？ひとりでいるのがそんなにたのしい？せっかくわたくしが友達になって差し上げるといっているのに、それをことわりますの？」
　本を読む女の子は本に目を落としたまま一言ぽつりと、しかしはっきりといいました。
「ちがう」
　と。
本を読む女の子は本に落としていた目をえらそうな女の子の方に向けました。そのひとみは静かな湖のように澄んでいました。えらそうな女の子は物怖じしてしまいます。
「あなたと友達になりたくないわけじゃない。あなたは友達をばかにした」
「どっ…どこにその友達がいるっていうんですの。本は何も出来ないって……」
　本を読んでいた女の子は本をパタンと閉じて落ち着いた声で話します。
「本はしゃべれないし、一緒に遊んでもくれない。でもわたしにたくさんのことを教えてくれる。不思議なことやたのしいこと、かなしいこと。たくさん。たくさん。なによりいい暇つぶしあいてになってくれるわ」
　えらそうな女の子は鼻で笑います。
「詭弁ですわ。どちらにせよあなたには人の友達なんていない。だって、毎日この時間にここを通りますけど、あなたはいつもひとり。

今だってひとりじゃないですの」
　えらそうな女の子は興奮気味に言いました。教室は静寂に包まれます。えらそうな女の子は思いました。すこしひどいことを言ってしまっただろうか？ひどい言葉に憤慨しつかみかかってくるだろうか？それとも目の前の少女は悲しみに顔をゆがめるだろうか？いつの間にか雲に隠されていた太陽が顔を出して教室を再び陽だまりに変えたとき、本を読んでいた女の子はにっこりと微笑みました。えらそうな女の子は動揺します。しかし、その笑みが自分に向けられたものでないと気がつくのにそう長くはかかりませんでした。
「ひな～。お花摘んできたよー。いやあ、やっぱしあのしげみは危険がいっぱいだよ。ひなには危険すぎる！　さっきカエルがぴよーんってさぁ…ん？　」
　ろうかの方から元気な女の子の声が聞こえてきました。
　元気な女の子は女の子たちに囲まれているひなに気がついて表情を曇らせました。そして、のしのしと、カニが前に向かって歩くみたいにして腕まくりしながら近づいてきます。
「ややや っ！　ヘイヘイ、お嬢さん方。わたしのひなを大所帯で囲んでなんだいなんだい？　ひなをいじめたりしたらあたしがゆるさないんだからねっ！」
　まるで太陽を隠していた雲を吹き散らした暖かな西風みたいに、元気な女の子はひなを取り囲む女の子たちを遠ざけていきます。
　ヒナと呼ばれた女の子は愛しいものをみるようにしてもう一度元気な女の子にっこりと微笑んでからいいます。
「ちがうの。レン。この人たちは私をあそびに誘ってくれたの」
　元気な女の子――レンと呼ばれた彼女は引き締めた表情を和らげてひなと顔を見合わせた後、えらそうな女の子に言いました。
「へぇーっ。ふぅーん。……そ。ありがと。」
　えらそうな女の子はレンがなぜ自分に感謝するのか理解できませんでした。
「となりのクラスのキョウカさんだっけ？この子しゃべるのあんま

し得意じゃないからさっ。でも、これからも仲良くしてね！　よかったらわたしとも。あっ…でも、そとに誘っちゃだめだよ。この子からだ弱くてあんまり外とか出られないからっ」
　レンは人差しゆびをたてて、腰に手を当てながらいいます。
「えっ…あっ…」
　そんなレンの姿を見てキョウカは気がつきました。ひなと呼ばれた目の前にいる少女が外の茂みの方をゆび差したときに、みどりといっしょにゆれる小さなひとかげに。
　ひなは動揺するキョウカにいいます。
「わたしはいつもひとりぼっちだわ。この時間もほかの多くの時間も。でもわたしにだって友達はいる。数は少ないけどみんなつながってるの。だから、暇なときにあいてをしてくれる本だってわたしの大切な友達よ。わたしはひとり。でも、レンをいつもとなりに感じることができるからさびしくない。一人だけどひとり（孤独）ではないわ。あなたはどう？　大切な友達はいる？　その横にいる娘達はしゃべれるし、いっしょに遊んでくれるでしょうね。でも大切なことを教えてくれる？不思議なことやたのしいこと、悲しいことを教えてくれる？　病弱な友達のために外の世界を運んできてくれる？　」
「……なっ……」
　ひなの言葉にキョウカはなにも反論できませんでした。ひなは続けます。
「たぶんしてくれないと思うわ。あなたの横にいるのはお人形さんだもの。クラスを回って集めてきたのね。でもそれはお友達？　お人形さんは物よ？　ものなんて友達になれるはずないじゃないの。友達ができないからお人形とお友達（お人形遊び）？笑っちゃう」
「ちがう！　」
　キョウカは背中に奔る冷たいものを感じて、ただ叫びます。今立っている場所が陽だまりであることを忘れさせてしまうようなその悪寒は、キョウカの内側から湧き出すようにして自由を奪って生き

ます。反論する言葉が見つかったから叫んだというわけではありませんでした。ただ、聞くのが我慢できなくなったのです。そして、血の気のうせた顔でキッとひなのことをにらみます。それが彼女にとって精一杯でした。

「ちがうくない。だって、あなたがこまっているのにさっきから彼女たちは何もしないわよ。言い返してこないし、そこに立っているだけ。あなたの　友達　を馬鹿にするわけじゃないけど。その　もの　はあなたの友達？　」

キョウカは後ろを振り向くのが怖くなりました。

みんながどんな顔をしているのか、どんな目を、どんな表情を、どんなことを思って何もせずに立っているのか――――初めて疑問に思いました。

「あなたいつもこの時間ひとりね？だって、彼女たちといつもいっしょにいるもの。友達はどこにいるの？」

「えっ……」

キョウカはなにも答えられません。

「ねえ。あなたひとりよ？さびしくないの？」

第一幕　リコリス（後書き）

つづきますので、見てくれたらうれしいです。

第二幕　デイジー　／　リリー

「ねえ、ひなぁ」
元気な女の子――レンは大きなリボンの女の子に話しかけます。
「なに？　レン」
大きなリボンの女の子――ひなは白詰草で冠を作る手を止めてレンに応えました。
「あのさ。さっき怒ってた？　」
ひなは白詰草を再度編み始めました。
「怒ってなんかないわよ。ぜんぜんね。これっぽっちも」
「ふ～ん」
ひなは隠し切れないあどけない声で、すこし大人ぶって言いました。レンは心の根に何かを隠しているような表情で相槌を打ちます。
ふたりはひなの席で、先ほどレンの摘んできたお花を編んで飾りを作っていました。ついさっきまでいたえらそうな女の子は青ざめた顔をして走って逃げていってしまい。取り残された女の子たちは、本当に遊んでくれる持ち主のいなくなった人形みたいになって、しばらく呆然とした後方々に散っていきました。波濤のように押し寄せた状況の大きな変化は波が引いていくようにして一気に収束し、それと対照的に外の穏やかな風景は何一つ変わりません。ふたりの会話はゆっくりと続きます。
レンはひなのことをじぃっと見てからいいました。
「うそつき」
「……」
ひなの手はまた止まりました。そしてレンの目を見つめ返そうとして、できずにそらします。
「なんで……わかったの」
ひなはまるで一世一代の完全犯罪のトリックを見破られたかのように落胆に沈み、顔を伏せて口を尖らせます。

「なんで？あっは！見ればわかるって！　あははは」
本心から笑っているレンをみてひなはすこしだけ傷つきました。
わたし・・・うそつくのへたなんだ……。
「それで？何について怒ってたの？」
レンはにっこりと微笑んでひなに聞きました。
「そっ……それは……いきなりあの娘たちがわたしのリボンをぐぃーっと……」
身振り手振りを交えて熱弁するひなのことをレンは半目で見て鼻を鳴らし、
「うそでしょ」
そういいました。
「……」
「どうみてもそういう状況じゃなかったしね」
そうだよね。心の中でひなは浅はかな自分を責めました。
「白状するね。どうせレンに嘘をいったって見破られるだろうし。あのね。友達をばかにされたの。レンのことじゃないわ。その……わたしの読む……なんというか……本のこと。」
ひなはレンの様子を伺うようにして上目づかいでいいます。レンは何も言わずにただ耳を傾けていました。
「それでね。怒ってすこしひどいことをいっちゃったわ。でも、わたしだって泣きそうなくらい悲しかった。ものはものでもわたしの大事な友達だもの。泣くところを見られるのは嫌だから、紛らわせるために怒ったらついむきになっちゃった」
ひなの白状は終わりました。しかし、レンは無邪気に笑ってひなにさらに質問します。
「ふーん。で？　なんであたしにうそついたの？」
ひなはすこしドキッとして、なにかいい言い訳がないかとひとしきり考えるように目を泳がせたあと、観念したとでもいうかのように語り始めました。
「レン。あなただってとっても、とっても大事な友達よ。でも、思

ったの。あの娘の言うことを聞いて。……本は、ものだから……ものと同じに扱われてるなんて……嫌だと思って……」
小さな静寂が教室を支配しました。暖かな風に揺れる丈の低い茂みがサァとささやきます。
「嫌だよ」
「……えっ」
はっきりと真剣にそう答えたレンをひなは驚きと失望の瞳で見ます。しかし、レンはにっこりと微笑んで。
「嫌だよ。物といっしょなんて嫌。もの扱いされるのも嫌。でもさ、ひなのそれは……ちがうでしょ？」
ひなは困惑しました。ひなはレンがなにを伝えようとしているのはわかりませんでした。
「ひなはさ、友達がものなんじゃなくて、たまたま物だった本が友達なんでしょ。それだったら、べつにいいじゃん。あたしはひなのことだーいすき。さっきひなもあたしのこと大切な友達って言ってくれたよね。あたしはひなの友達。そんで、ひなは本も友達ってことだよね！ひなは、全然おかしいくなんてないんだから、ほら！胸張って！あっ……でも、ごめんね。意地悪ないい方して」
ひなは目をぱちくりさせて、そして「ふふっ」とすこしだけ笑いました。
「ううん。実はね、わたしさっきからずっと迷ってたの。本とお友達なんてやっぱりおかしいのかなって。自信もてなくなっちゃったの。でも、レンのおかげでわかった気がするわ。ありがとう」
ひなは心のそこからお礼を言いました。そうしてもう一度驚きます。わたしのちっぽけな悩みを隠すためについた嘘の悩みを解決する手段を示すとともに、本当の悩みまで解決してしまうなんて。
わたしが悩みを隠そうと嘘をついて、わざとへんな問いかけをしたのもきっとお見通しなんだろな。
「そろそろ帰ろっか」
レンは元気にそういいました。そとはまだまだ明るいです。教室

の中は蛍光灯をつけていなくてもはっきりと本を読めるくらいのいいお天気でしたが、もう帰る時間なのでした。
「そうね。でも、今日は一緒に帰れないわ。図書館によっていかないと」
「そっかぁ。じゃあね。また明日」
「あっ……ちょっとまって」
気をつかって急いで帰り支度をして帰ろうとするレンでしたが、ひなが呼び止めます。そしてできたばかりの白詰草の冠をレンにかぶせて、
「わたしの……一番は、レン……あなたなんだからね」
顔を赤らめてそんなことを言いました。「本といっしょの扱いをされて嫌じゃない？」そんな陳腐な問いかけに帰ってくる答えなんてはじめからわかってました。そんなことで悩んでいたなんて嘘だって見破られることだってわかっていました。何十年、何百年とたくさんのことを変わらずに教えてくれる本も大切な友達です。そうであっていいのだとレンが教えてくれました。でも、変化し続けるこの一瞬をともに歩んでくれる友達がひなにとっては一番でした。
「うん！」

第三幕　ヴィオレット

キョウカちゃんがいなくなって、わたしたちはどうしていいのかわからずにただ呆けていた。多くの娘たちは自問自答していたと思う。あのとき、なんでキョウカちゃんのために言い返して上げなかったのかなって。ひとりでいたわたしたちと、キョウカちゃんは友達になってくれた。うれしかった。でも、ひなちゃんって娘の言うことも間違ってはいなかった。わたしたちには意思がなかった。群れていればそれでいいと感じた。誰かといっしょにいればクラスで浮かなくてすむ。惨めにならずにすむ。いじめの対象にならずにすむ。たしかに、こんな動機で集まった人間たちが、大切なことを教えあったりできるはずなんてない。そんな理由でいっしょにいただけのわたしたちは、そういった意味ではきっとお人形さんだったんだろう。いまさらになって自分たちが情けないと思った。

「ねえ、ひな」

「ん？なに」

ひなちゃんって娘とレンちゃんって娘のお話が聞こえてきた。

「あのさあ。わたしたちっていつ友達になったんだっけ？」

「いつのまにか」

「ん～、そういうんじゃなくて！いつ知り合ったんだっけってこと」

「レン。人間って知り合った瞬間から友達なの？」

「そのとおりさ！　感じるものがぁーあったのさぁー！」

「……そうね。確かわたしがレンに話しかけたのがはじめじゃなかったかしら」

「えっ……それどこだっけ」

「忘れたの……？　まあいいわ。すぐそこのそとにつながるドアの横でレンが靴紐を結んでいるときに、わたしがお花を持ってきてほしいって頼んだのがはじめ。あの時は勇気を総動員してレンにはなしかけたの。活発そうだったから、正反対のわたしの頼みなんて聞

いてくれないと思って……」
「あ～。でも、あたしだって思ったよ。勉強できて、女の子らしくて、かわいいひながあたしに何の用かなーって。『目障りよ。そこどいて。私より二センチおおきいあなたの座高が私の視界を邪魔するの』とか言われるかと思ってすこしドキッとしたよ」
「……」
「どうしたのひな？急に黙って。まさかお花を摘みに言ってほしいって、その口実だったとか・・・」
「……」
「ひな？　何か答えてよ！　そんな食い倒れ人形みたいな表情で固まられてもなんもわかんないよ！　ひな！？　」
そっか。
わたしは気がついた。わたしたちはみんな「遊んであげてもいいわよ」なんて不器用にいう彼女に誘ってもらった。ひとり（孤独）から救ってもらったんだ。だったら何で、わたしたちはあの娘に同じように声をかけてやれないのだろうか。わたしたちはお人形さんだった。でも今は遊び相手のいないただのガラクタ。そんな今だから思える。
――あの娘と、友達になりたい。
「あそんであげる」勇気をもってそういってくれた。あのとき大切な何かを教えてくれたあの娘の友達に。
「ねえ」
決心したわたしはみんなに話しかけた。そして、みんな同じタイミングで「ねえ」って言ったことの驚いた。
「あのさ。キョウカちゃんのこと探そう！　」
「そうだね。わたし教室見てくるよ」
「じゃあわたし図書館にいく」
「それじゃあわたしは……」
わたしたちはみんなでキョウカちゃんのことを探すことにした。それぞれに散っていったみんなの足取りはきっと軽いだろう。だっ

てわたしの足が軽いんだから。誰がはじめにキョウカちゃんに話しかけられるのか競争するみたいな勢いでみんな教室を後にした。

友達になれたとしても、あの娘はけっこうわがままだから、当分先まであの娘にとってわたしたちは振り回されるお人形かもしれない。でも、大切なことを教えられるお人形さんになろう。

ひなちゃんって娘も、ものだって友達って言ってたし。

第四幕　ピンク

「今日はとても楽しかったわ」
大きな紫色のリボンの女の子はやさしく声をかけました。
「あなたって、とっても面白いのね」
その声はふたり以外誰もいない、古びた茶色が印象的な図書館に響きます。
「はじめ見たときはね、すこし汚かったからちょっとなって思ったんだ。でも、ひとは見かけによらないってかんじかしらね・・・でも今日はこれでお別れ」
女の子の背中はすこしでしたが震えていました。女の子はそれをしっかりと抱きしめます。
「ありがとう。楽しかったわ。ずっとずっと忘れない。あなたのことを友達じゃないって言った人がいたけど、わたしたちはずっと友達。あなたとの出逢いも、あなたから教えられたことも、あなたの思いでもずっとずっとわたしの大切なたからもの」
女の子は大粒の涙をこぼします。
「大好き」
そういって女の子は図書館のソファの上にそれを置いて去っていきました。

第五幕　スイートピー

それは、ただ静かにソファのうえに腰掛けていた。つくろうこともなく堂々と、しかしどこか悲しげに。
「ねえ、あなたひとり？　」
赤いリボンをつけた女の子はそう呼びかけました。その声はふたり以外誰もいない、古びた茶色が印象的な図書館に響きます。
「そう」
少女もどこか悲しげでした。
「あなた、こんなところで何をしているの？いつもあなたを見かけるけど、ずっとひとりね」
少女はつい何分か前の調子で、それに話しかけます。そして、急にうつむいてスカートの端をぎゅっと握り締めると、
「わたしと同じね……」
そういって泣き始めてしまいました。誰もいない図書館にすすり泣く声が雨音のように響きます。
女の子はやがて泣くのをやめて、それに向かって言いました。唇は震えていましたが、はっきりと――
「ねえ、友達になってくれない？　」

花言葉
リコリス（悲しい思い出、ひとりぼっち）
デイジー　、ひなぎく（むじゃき）
リリー、ゆり（あなたはわたしをだませない）
ヴィオレット、すみれ（忠実）

ピンク、かすみそう（こころからのよろこび）
スイートピー（門出）
Ａ　ｌｉｌｙ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｖａｌｌｅｙ、谷間のゆり、すずらん（こうふくのやくそく）

第五幕　スイートピー（後書き）

第一部はここでおわります。引き続き、第二部を読んでいただけたら嬉しいです。

プロローグ（2）

学校とは、教養をつける場所。常識を学ぶところ。勉強をするところ。教えるのは先生とは限らない。学ぶのは生徒とは限らない。いつの間にか主体性を身につけた「生徒」たちが、「先生」に学ぶ場所。

学校とは、挑戦する場所。すべてが初めてで、崖の上から飛び降りるみたいな試練が待ち受ける場所。一度や二度の失敗で、彼らはあきらめたりしない。無意識のうちに上へ向かって努力する。

この世の中で、一番「…したい」という願いに溢れる場所。

プロローグ（2）（後書き）

第二章では一人称視点がほとんどです。恋の話です。

第一幕　秋海棠

とある学園でのことです。

今日もつんつんした髪の男の子が、中庭の真ん中に立つ大きな木の根元に熱い視線を送っていました。その瞳はまるで黄金色の琥珀をつめたようにキラキラと光り、ただでさえ暑い夏の午後をさらに暑くするのでした。少年の顔立ちは年齢相応に丸みを帯びてはいるものの凛々しく、外で運動などしたのなら校庭に出て汗を流す姿に女の子が少しドキッとしてしまうくらいに精悍なのです。しかしどうでしょう。男の子の顔は少し緊張にこわばっているようです。

その中庭は学園の広い敷地の一区画、旧講義棟のなかに在りました。今使われている講義棟は、広く、大きく、新しく、白を基調とした前衛的な建築は無機質ながらもそこに「冷たい」と形容されるようなかっこよさがあります。旧校舎は三階建ての木造建築でした。いたるところに修繕の跡が見受けられ、つい最近まで使われていたことを物語ってはいるものの、老朽化の具合は激しく、実は先生たちに入ってはだめといわれているような場所なのでした。新しい講義棟のなかにも、広くて美しい無菌室の中に作られた公園みたいな中庭があります。しかし、彼女たちは好んでここに集まってくるのです。

中庭の大きな木の下には五人の女の子たちがいました。おままごとをして、カードあそびをして、そうして疲れたころに木を座椅子代わりに寝転がる。時折、そよと風が吹くと、女の子たちの頬をなでた後、金の油に照りついた緑色の葉っぱが揺れて、優しい木漏れ日を少女たちに落とすのでした。それが彼女たちの日課。まるで、忘れ去られた楽園で戯れる妖精のように、女の子たちは昼休みを謳歌します。

男の子は、その中のひとりの妖精に用事がありました。このときばかりは、彼女以外の妖精も男の子にとってはちょっとした邪魔者

です。なぜなら男の子は彼女だけに用事があるのですから。
　男の子は中庭を囲む旧講義棟の柱の影に隠れていました。とりあえず一歩踏み出してみます。この一歩にどれだけの労力と勇気を振り絞ったかわかりません。しかし、柱からばねがくっついていたかのように、すぐに影に舞い戻ってしまいます。そのたび、女の子たちに自分の姿を見られていないかとドキドキし、そーっと木の影をのぞいて何事もなかったと確認すると、ほっと胸をなでおろすのでした。彼女たちの「楽園」を壊してしまうことを恐れた開拓者のような気持ち・・・ではありません。そんなのは言い訳です。男の子はわかっていました。すぐに隠れてしまうのはきっと自分が弱いからなのだと、そのくらいわかっていました。自分のけちな「体裁」や「評判」、「名声」のために動けないでいる自分を見つけるたびに男の子の心は悔しさでいっぱいになります。でも、男の子はそんな枷を断ち切って進むだけの「理想」がありました。もう自分の中だけで完結する「理想」なんかじゃありません。男の子は一歩踏み出し、二歩目を踏み出したのです。
「ん？」
　ひとりの女の子がこっちを見ました。
「どうしたの？ナズナちゃん？　」
「うん。なんかさっき人がいた気が…」
「気のせいだよ！　きっと」
「そうだね。えへへ。もう昼休み終わりだね。帰ろっか。あんまり遅くなると先生にしかられちゃう」
　そういって女の子たちは男の子の隠れる柱のすぐ横を去っていきました。
　男の子はとても情けなくなりました。彼女には気がついてもらえず、クラスでも目立つほうでない女の子の一瞥（？）によってひるんで引っ込んでしまったことを。男の子は大きな声で叫び…たくなりましたが、まだ近くに女の子たちがいそうなのでやめました。この思いをどこかにぶつけたくて、情けのない自分を叱咤したくて、

白い壁を殴りつけました。すると、手にジンジンと響く鈍い衝撃…はなく、意に反してあっけなく手が壁を貫通して、勢いあまって老朽化した柱の中に半身を突っ込んでしまいました。

あたりに静寂が訪れます。木の葉の揺れる音、小鳥のさえずり。柱の建材の木の隙間から漏れる陽光。お尻だけを柱の中から突き出した男の子は、涙が出るのをぐっとこらえました。

こうして今日も、昼休みが終わります。

第一幕　秋海棠（後書き）

新しく始まった物語は、第一章も少しだけ関係しています。第一章が少しくらい感じだったので、第二章は明るい感じのハッピーエンドになったらいいなと思って書きます。

第二幕　林檎

僕は恋をすることにした。

おっと、いきなりすまなかったね。ごほん、僕の名前はライタ。この学園に通う三年生だ。つまり九歳ってことだけど、小学生だからってあなどらないでほしい。僕はみんなとは違う、大人の頭を持っているんだ！大人か子供かを決定するのは、単なる体の大きさやだせい（惰性）で生きた密度のない人生の積み重ねで決まるものではない。「どのくらい考えたか」であると僕は思うのだ。僕は生きてきたこの九年間を誰よりも密度の濃いものであると自覚し…そして！大人の思考を手に入れたのだっ！その思考パターンで考えた結果、僕は恋をすることにした。

なぜそのような結果に至ったかは、ひとまずおいておこう。

自慢じゃあないが僕はクラスでも友達が多く、成績だって一番…（ではなくて、あの本ばっか読んでる「ひな」とか言う女子にいつも先を越されて何でも二番なんだよちっきしょう…。）…まあこの話はおいておくにしても、野球の部活にだって所属していて、僕は期待のエースとしてもてはやされている。何かに属しているというのは社会的な信用にもつながるからね（でも、体育の時間はあの「レン」とかいう女子が怪物じみた運動神経でクラスの注目を総なめにするんだよなあがってむ…）。

そして、一般の年ごろの男子なら誰もが抱く感情、この僕という存在をみんなに親しみやすくするための手段。それが「恋心」だ！僕にソレが必要な理由はふたつばかりある。

恋をして、僕には小さな秘密ができる。「ＯＯＯＯ」ちゃんが好きだという秘密だ。これは同じ「恋心」を持っている男子とさらなるキズナが生を生む。秘密を共有しあう仲ってやつだ。つまり、半ば秘密でなくなることを前提しているわけだが、僕にとって「恋」なんてものは手段に過ぎない。しっているかい？ある遠い遠い国で

は結婚していることが社会的な信用のひとつになっているんだ。なぜなら、守るべきものがあるという使命感が生まれるからなのだ。…まあ、結婚までは行かないかもしれないけど。

あとひとつ。恥ずかしい話、僕はまだ恋をしたことがない。恋を経験してみたいというのもまたひとつの理由だ。

さっき話したみたいに、僕にとっての「恋」とは社会的（クラスの）信用を得るためにするものだ。だから、極論すれば二つ目の理由なんてあってないようなものだ。本当の恋ができなくてもいい。誰かが好きという事実らしきものさえあればいいのだ。それで、僕はまたひとつエリートへの道を歩むっ！

生徒会長に俺はなるっ！

違う教室にいる、前側の席にいる彼女を好きになることにした。教室のドアの影からそーっと、自然にのぞいてみる。くるくると巻いた綺麗なロールヘア。憂いを帯び、濡れたような黒いまつげと凛々しいつり目。ツンと張り詰めた彼女の周りの空気。頬は白く穢れを知らない白磁のようでいて、誰よりもやわらかそうだ…。

っごほん！別に見とれていたわけではないっ。彼女を観察していただけだ。

教室に戻って机に座る。僕の作戦は完璧だ。あの子の性格はちょっとキツめだから、みんな寄り付こうとしないけど、実は男子の中では結構人気が高い。あの子を好きになって、どうしても仲良くなれないという事実（仮）をほかの男子と共有する。さらには、そこからぽろりとこぼれた噂話にクラスの噂好きの女の子たちが食いつき恋の話に花が咲く。…花が咲くかはわからないけど、女子はスキャンダラスな話が大好きなのだ。

ふっふ…ふふふふっ。

これで僕はまた新たな人脈を作りクラスの信用を得ることができる。

「おい…おい…ライタ。きいてんのか？ライタ！」
話しかけてきたのは僕の友達の一人、リュウノスケ君だった。流れるみたいな黒髪にふちの厚いメガネをかけた男子。たしかリュウノスケくんも女子の中では結構人気があった。僕ほどではないが勉強もできるし、せっかくの大きな瞳を半ば、だるそうにしている彼は、女子の中でも「クール」でかっこいいという話になっているらしい。
たしかに、世の中を諦観しきったようなその双眸は、まるでこの世のカオスの中から自分だけの真実を見極めようと勤めている涅槃に入った僧のようでもある。
僕は、いきなり話しかけられたことにも動じずに、慌てふためくこともなく、死神に魂を売った大学生のような顔で言ってやった。
「リュウノスケェ…僕はァ…新っ世界のホ…．生徒会長になるフゥ…」
「お前なにぶつぶついってんだ？」
大丈夫じゃないヤツを見る顔でこっちを見てきたので、何事もなかったような顔をしてリュウノスケくんに向き合った。もう作戦は始まっているのだ。
「リュウノスケくん。実は、僕には好きな子がいるんだ」
「…。ふーん」
リュウノスケくんはなぜか知らないけど心底いやそうな顔をした後に相手の気分を害さないように無理やり驚いて見せた。気に触ってしまったのだろうか？他人の恋の（のろけ）話しを聞くのはあまり気分がいいものじゃないって、どこかの本で読んだことがあるけれど、彼はそんなに狭い心の持ち主じゃない気がする。何かあったのだろうかと疑問に思いつつ次の言葉を出そうか迷っていると、
「で？どうしたんだよ。気になるから続きを話せよ！」
と、言ってきてくれたので話すことにした。

第二幕　林檎（後書き）

登場人物ライタの内省なのでいつもより少し読みにくいかもしれませんが、続けて次話も読んでいただけたらうれしいです。。第一幕の時勢とは少しずれています。第一幕が本来プロローグの体裁をとっているはずなのですが、構成上やむ得ずこのようになっております。ご了承ください。

第三幕　芥子

「で？だからどうしたんだ？」
「え？だからって…そのー」
すべて（仮）を話し終わった後のリュウノスケくんの反応は思ったよりも淡白だった。むしろ、いうやつを間違えたかもしれない。リュウノスケくんは「告白したくてもできない」なんていうようなキャラではないのだ。きっと、好きな子がいたらその背中で好きにさせるタイプだ。
くそっ、はじめからつまずいてしまった。…いいや、これは好機！こういうのはどうだろう？
どうしても告白できない僕が、恋のアドヴァイザー・リュウノスケくんに頼んでアドヴァイスをもらう。それを実行する課程は、秘密にしなくともいろいろなところから漏れるだろう。もちろん、わざとらしく大げさに実行する。それを聞いたクラスの友人たち僕に同情を抱き、さらに好感度を上げる…という作戦だ。…われながら完璧の作戦だ…。さあ、実行に移そう！
「いいや、それでね、リュウノスケくん。キミに教えてもらいたいんだ。モテる秘訣ってヤツをさ」
へりくだったり、頭を下げることも時には必要だ。しかし、最後に勝つのはこの僕、ライタでなければならない。
「え？何言ってるんだ？俺はモテないよ、さっきだって、振られてきたばっかだし」
「なん…だと」
これは、予想が外れたことへの驚きではない。無自覚。いいや、それ以前に、リュウノスケくん彼女いたんだ…。このとき、へりくだるとか言う以前に、このお方はもしかして本当に尊敬に値する人なのではないかと激震している、僕がいた。
いやいや、何が起きても僕の計画は揺らがない！

「いっ…いいや、キミはモテるよ。じゃあ、そう…とりあえず僕だけで頑張ってみるから、キミは手伝ってくれないか？たのむっ。このとうりだ！」
でも、僕は内心ひどく動揺していた。。
「いいよ。でも具体的にはどうすればいいの？」
リュウノスケくんはクールに見えるけど、友人を大切にするいいヤツだ。内心、O．Kしてくれるか不安だったけど、半ば「いいよ」と言ってくれることを確信していた。「こと、友人関係においては見る目を持たんといかん」そうお父様が言っていたけど、僕の目が正しいのなら、リュウノスケくんは胸をはって合格点であると言える。
「ありがとう。リュウノスケくんは僕のすることを横から見ているだけでいい。何か間違ったことをしたと思ったらすぐに注意してほしいんだ」
「いいけど、力になれるかな」
「もちろんさ！」
こうして、僕はスタートラインについたのだ。

彼女は隣のクラス。いつも、決まった女の子たちと遊んでる。彼女たちの行動パターンを探ってみることにした。
まず、登校して一時間目と二時間目の間はどうやら、クラスの女の子たちだけで話しているようだ。別段、ほかの女子とかわったことはない。しかし、昼休みになると教室の外に出かけていくのだ。どこに行くのかとついていってみると、どうやら旧講義棟であるようだ。たしかここは、老朽化が激しいために立ち入り禁止になっているはずだ。でも、そんなことはお構いなしに、女の子たちは旧講義棟の中に入っていった。
電気のついてない木造校舎内、しかし、斜陽が差し込み構内は割りと明るかった。夜入ったらさすがに怖いかもしれないけど、陽光

が照らす旧講義棟内は静寂に包まれ、しかし斜陽がきらきらと反射させるほこりの粒はどこか暖かさを感じさせた。
　ほこりっぽい廊下を女の子たちに見つからないように歩きながらリュウノスケくんは言った。
「なあ、ライタ。これって、その…ストーカーってヤツなんじゃ」
「ちがう。ちがうよリュウノスケくん。これは予習というヤツさ。彼女たちにどのポイントで接触し、彼女だけを孤立させ僕の思いをぶちまけるかという目的のね」
「ライタ…きもちわるいよ」
　どれだけ彼女を愛しているのか（仮）ということを力説したつもりだったが、どん引きされたので、訂正することにした。
「冗談さ。告白するのもタイミングって必要だと思うんだ」
　「そうだね」といってリュウノスケくんは黙った。なぜなら、女の子たちがどうやら、ドアの向こうに消えていったらしいからだ。ドアはもう壊れてしまっていて、その役割をしていなかった。近くに着て気がついたことだが、ここからはどうやら、外に出られるらしい。近くに身を隠すにはちょうどいい大きさの柱があったので、そこに二人で身を隠しながら出て行った彼女たちの様子をうかがうことにした。そして僕らは彼女たちを観察しようと柱から身を乗り出す。
「――――！」
　「出て行った」というのは間違いなのかもしれない。そこは講義棟の中に、まるで箱庭のように作られた中庭であった。その中庭の中央には緑の葉をいっぱいにつけた大きな木が立っていた。何の木かは知らない。でもその木はとても大きく女の子たちのためだけの日傘となっていた。初夏の日差し。頬をなでてゆく金色の風。彼女たちは講義棟から「出て」いた。しかし、同時に、まるで僕なんかじゃ手の届かない別の世界に「入って」しまった気がした。
　旧講義棟の中を通ってしかたどり着くことのできない空間。そこは、学校の裏の林と旧校舎が囲む秘密の場所。

そこで、戯れる彼女たち。
僕は、むかし小さなころにお父様に連れられて見に行った、有名な絵のことを思い出していた。湖に浮いた浮き島に、大きな木が立っていて、そこで戯れている妖精たち。陽光が印情的だったその絵は僕をその絵の中に引き込み、無性に胸を高鳴らせたことを覚えている。
今、眼前にある、その「絵画」の中に描かれた彼女の笑顔に僕は、あの時とは少し違う胸の高鳴りを感じていた。
「どうしたの？ライタ」
「え？」
我を忘れていた。そんなちっぽけなものではなかった。僕の心は、一瞬彼女に奪われていた。
「いっ…いや」
そう自分で感じた瞬間に、いきなり恥かしさがこみ上げてきてしまった。
「今日は、これくらいで・・・ かえろう」
いきなりどうしたんだと、リュウノスケくんは得心の行かないような顔をしていたが「わかった」といって了解してくれた。

第三幕　芥子（後書き）

次の話では第一章で登場したひなとレンが出てくる予定です。

第四幕　留紅草

教室に戻ってきてからの僕は、つい数時間前と確実に何かが違った。
まるでそれは、胸の中で春の虫たちが蠢動するようにどこか具合が悪く、しかし悪い気分ではなかった。
なぜそんな気分になってしまっているのかと考えるたび、浮かんでくるのは彼女のこと。
「なあ、リュウノスケくん。彼女…何してるのかなあ、いま」
「…授業中にでかい声で話しかけてくんなっ！」
ほうけていたようで授業など一切頭に入ってこなかったが、今は授業中らしい。休み時間に話すみたいに話してしまっていた自分に、今さらになって驚いてしまう。前の席のリュウノスケくんは「授業受けてるにきまってんだろ」と、小声で僕に言ってくれた。
そうか、僕と彼女はいま、同じことをしているのか。
「はぁ」
胸にたまったどきどきが、口からため息となって漏れ出した。
じゃあ、僕も授業を頑張んないとな！
「はぁ」
…っだめだ。どきどきで授業を受けるって場合じゃない！
この感情をなんというのだろう。ひどく胸をしめつける、なんというか…．形容できない…アレ。
語彙は人一倍だと思ってた。でも、どうしても口にできないんだ。口にしてしまったら、うすっぺらい感情のひとつになってしまいそうで怖い。
彼女がなにをしているのか知りたい。
彼女が何を考えてるのか知りたい。
彼女と話してみたい。
そんな気持ち。

この気持ちに名前をつけるというなら、これは探究心というヤツだろう！そう、これは算数の問題の答えがどうしても出ないときとか、野球でホームランを打つコツがつかめないときの感情に似ている。「その」先を知りたいっていう感情だ。きっとそうなのだ。

彼女のことをもっと知りたい。

うーん。でもどうやって。

「ねえねえ、リュウノスケくん」

こんどは周りに気をつけて、声を小さめにリュウノスケくんに話しかけた。

「なんだよ」

リュウノスケくんは黒板を書き写す手をとめて、僕のほうに顔を少し傾ける。

「彼女のことをもっと知りたいんだ。でも、このまま彼女を観察するだけじゃ限界があるし…その、なんか後ろめたい。どうしたらいいのかな？」

リュウノスケくんは眉にしわを寄せて宙を眺めながらひとしきり考えた後、僕に答えをくれた。

「まず自分を知ってもらったらどうだ？知りたいなら直接話すのが一番だろ？でも、ライタとその娘の接点は、今のところない。まず、友達になったりしたらいいんじゃないか？」

「えっ？！女子と？！」

「だからお前はでかい声でっ！」

そうこうしているうちに授業は終わり、休み時間が来る。

リュウノスケくんに言われたとおり、僕を知ってもらうことにしようと思う。でも、どうやって。いきなり話しかけるのはなぜか気が引ける。女子にだってたくさんと知り合いはいる。でも、友達かといわれると、きっとそうではなくて、ほとんどいない。

最終的には別のクラスの女子と友達になるなんて、はずかしい。
「なら、順序を追って小さいところから仲良くなればいいよ。そうしていくうちにライタもだんだん慣れてくるんじゃないか？」
「具体的には？」
リュウノスケくんはひとしきり唸ったあと、僕にまた答えをくれた。
「軽いジャブ的なプランで、そうだな、その娘と仲のよさそうな女の子と仲良くなって、さりげなくライタを紹介してもらうって言うのはどうだ？」
「わかったよ。それでいってみる」
よいアイディアが浮かぶわけでもないので、リュウノスケくんの言うとおりにしてみようと思う。
でも、彼女といつも遊んでいる友達たちはみんなクラスでも目立つほうじゃない人たちばかりだ。とりあえず全員の顔を思い浮かべてみたが、話したことのある女子なんて一人もいなかった。
でも、こんなことじゃ僕はくじけないっ！友達がだめなら、友達の友達、つまり僕と割りと親しい女子に頼めばいいことじゃないか！結構遠回りになってしまうけど、これもいたしかたなしである。この考えをリュウノスケくんに言うと、いったん苦笑いしたあとに肩をポンとたたかれ「頑張れよ」といわれた。実際僕もまどろっこしいとは思う。でも、しないよりはずっとましに思えた。

そいつは運動が恐ろしいほど得意なくせに、いつも友達と一緒に室内で遊んでいた。たまに外に出て、花や綺麗な石ころなんかを教室に持って、きておとなしく遊ぶ。彼女の力を求めるドッヂボール男子たちはたくさんいるというのに、人のはけた教室内でふたり遊び。
体育が得意な人間は必然的にクラスの人気者になれる。などというのは、部活のコーチがいっていた。そんなこんなで、運動の得意

だったコーチは小学生のときクラスの人気者だったらしい。はじめは信じていなかったけど、どうやらほんとらしい。現に、今目の前にいる女子、レンちゃんはクラスの人気者である。その、裏表のない性格と誰にでもせいいっぱいの笑顔を振りまく人柄もその要因といえるだろうが、小学三年間の経験則上体育の得意なヤツはクラスの中心であることが多いことも確かであった。その人気者と、何よりも人脈を重んじる僕が親しくないはずもないので、レンちゃんに頼むことにしよう。たしか、レンちゃんは彼女の友達の一人、４組のナズナって娘と仲がよかった気がする。

「やあ、レンちゃん」

「ん？　なんだいっ？　ライタくんっ」

　レンちゃんは今日も友達のひなちゃんと遊んでいた。ひなちゃんはいつも本を読んでいて体が弱いのだけど、僕よりも頭がいい。かくゆう、ひなちゃんには成績でいちども勝ったことがない。ひなちゃんは大きな目を眠そうに半開きにしているあたり、リュウノスケくんと似ている表情をしているけど、さすが頭がいいだけあって（？）その瞳には底知れない奥が秘められているように感じた。ひなちゃんもいきなり話しかけてきた僕に胡乱（うろん）にまなざしを傾ける。

「じつはさ、キミの友達のナズナちゃんって娘と友達になりたいんだ。何でかというとだね？　その友達のキョウカちゃんって娘とも話がしたいからなんだ。しらないみんなとも友達になりたいんだよ。おねがいだ。キミから接触をしてくれないか？　」

　リュウノスケくんは何故だかあきれた顔で「お前、ばかだろ」とつぶやいていた。あとでちゃんと事情を聞こう。

「わかったよっ！　」

　そういって、レンちゃんは急ぎ足でかけていった。

　取り残された僕とリュウノスケくん、ひなちゃんの間には小さな沈黙が生まれた。ひなちゃんは僕が勝手にライバル視しているだけで、あまり話したことがないし、結構無口なタイプだ。レンちゃんが戻ってくる間、少しばかり教室に静寂が訪れるだろう。

「ねえ」
そうつぶやいたのは以外にもひなちゃんであった。ひなちゃんは僕に向かって話しかけていた。
「ねえ、キョウカちゃんって娘のこと好き？　」
「ほぉぅえっ？　」
あまりにいきなりだったものだから、驚いて変な声を出してしまった。というか、意図してばらしたわけでもないのに何故ばれる？しかし、真の目的というのはつまりこれなのだ！僕が恋のために頑張る僕をクラスのみんなに見せ付けなければならない！
「っうん。そうだよ。そうなんだよねー。でもさ、直接告白とかできなくてさ。どうしようかなーっておもってて…あ、ゼッタイニ、ミンナニハ、ナイジョダカラナー。ウワサトカニサレタラコマッチャウシナアー」
ふ…・相変わらずの迫真の演技っ。みたか！でも、話しちゃうんだろー？ここまでいうと逆に誰かに話したくなっちゃうんだろー？いいぜ？話せよ！僕の思惑通りに…
「話さないよ」
「え？　」
ひなちゃんのめはとても真剣だった。席に座ったまま僕の目を見すえて、僕に大事な言葉を言うようにひとこと。
「話さないよ。あなたにとって、とても大事な気持ちなのだろうから。おうえんしてる」
「え？　あ…うん。ありがとう」
僕は物怖じしてしまう。何かまずいことをいってしまったんじゃないかとやはりドキッとした。
そんなやり取りが在ったとも知らず、レンちゃんがものすごい勢いで廊下を爆走してきた。
「らーいーたーくんっ！つれてきたよっ！　」
よし！よくやった！レンちゃん！ありがとう！！
…。…。つれてきた？

まてよ。そういうことじゃなくてねっ？さりげなく僕の話をしてくれるだけでよかったんだよ？

はっ！

リュウノスケくんまさか、「おまえそれじゃ、伝わってネエヨ」っていいたかったんじゃ。

「接触したいんでしょっ？あれ？違った？でも友達になりたいっていってたよね？じゃーいっしょか！ま、どっちもつれてきたから、手間が省けてよかったね！」

辺りを見回す。レンちゃんの走るスピードに追いついて来れないせいか彼女はまだ顔を見せていなかった。

そして、リュウノスケくんはいつのまにかいなくなっていた。ひなちゃんは私は関係ないといったふうに本に目を落とし、全くこっちを意識していない。

「…ごめんっ！」

僕はいちもくさんに逃げた。彼女の友達ならともかく、いきなり話すなんて僕には荷が重すぎるっ。

昨日は大変な目にあった。レンちゃんとうまく意思が通じ合えなくて、彼女を呼ばれてしまうわ、そのあとレンちゃんの家まで謝りに行かなきゃならないわ。

しかし、あきらめるわけにはいかないのだ。

どれもこれも、僕がさらなる高みへ上りつめるためだ。

「昨日は逃げちゃったけど、今度は勇気を出して接点を作ろうと思うんだ！」

教室の中、朝の会（ホームルーム）が始まる前の小さな喧騒の中、ボクはリュウノスケくんに話しかけた。

リュウノスケくんはこちらを向き、「ふ～ん」といって意味ありげな目でこちらをみた。

「なんだい？」

「そう、何度も失敗できるわけじゃないんだぞ？　」
「わかっているよ」
「ほんとうか？　」
　僕はリュウノスケくんの言っていることの意味がわからなかった。その意をくんでくれたのか、リュウノスケくんは小さな声で僕に説明してくれる。
「ボクはライタの友達だ。だから注意だけはしてやりたい。ライタ。お前が不器用なのは、ずっと前から知ってる。で、不器用なりにうまくやってるってことも知ってるし、ちょっと偏った考え方をしている気がするけど、周りのみんなよりもずっと大人だってことも知ってる。ここからが本題。お前、わざと話をでかくするようにふるまってない？　」
「あっ…え」
　リュウノスケくんの分析は恐ろしいほど的中していた。僕はかえす言葉を必死に探したけど何もでてこない。いきなり、心の奥底を見透かされたようで、僕はまた逃げ出したくなった。
「あたってるのか？だったら、もうやめたほうがいい。昨日のことはもうクラスの一部でうわさになってる。昨日あれだけ騒いでたんだ。誰かが見ててもおかしくない。もちろん、それはお前が望んでやったことなのかもしれない。おおかた、お前はそれを話の種に『みんなとの交流をさらに深めよう』とか思ってるのかもしれないけどな、そんなにうまくはいかないよ、きっと」
「――――」
　僕は完全に閉口してしまった。しかし、いいたい事はたくさんあった。何でソレがいけないことなのか、うまくいかないなんてなんでいえるのか。
　疑問を言葉にできずに口をもごつかせていると、リュウノスケくんは答えをくれた。
「もしかしたら、高学年とかもっと大きくなったら、そういう駆け引きとか大切になっていくのかもしれない。でもさ、お前は大人に

なったつもりでいても、周りはみんな子どもだ。きっと、冷やかしに来る人たちだってたくさんいるだろう」
あ…。全くの盲点だった。と、自分で気がつく。
僕はきっと頭の中で、「男子」は自分、「女子」は自分の中のイメージだけでシュミレーションをしていたんだ。
でも、実際相手にするのはみんな違って、みんな僕みたいに考えるとは限らない小学三年生だ。
「お前はいいかもしれない。そんな状況でも、わざとおどけて見せて、お前の思惑通りにクラスのみんなの中心でい居続けられるかもしれない。でも、キョウカって娘はどうなる？冷やかしたり、からかわれるのはお前だけじゃないんだぞ。ほかのクラスまで面倒見るつもりか？生半可な気持ちで、他人の気持ちも考えずに好きとか嫌いとかを利用するのは、いいことじゃないと思う」
ああ、僕はなんて愚か者なんだろう。自分の至らなさに気がつくのは、この数分の間で何回目だ？どれもこれも、僕が何も考えずに撒いてきた種によるものだ。　お父様が全部知ったら、きっと地の果てまで殴り飛ばされるだろう。
でも、
「いまなら、どうにかなる。あの時、途中からボクはあの場に居ない。見られてないんだよ、うわさを流したやつに。だから、何のかかわりもない第三者のを装って、このうわさが勘違いだってことをみんなにながす。まだ、そんなに広まってないから、今ならまだ間に合う」
リュウノスケくんの言葉はとても厳しかったけど、どれも思いやりがあって、優しかった。いってくれる言葉は全部ありがたくてうれしい。
でも、
「生半可なんかじゃない！」
「――？！」
大きい声を出してしまったために、クラスのみんなを驚かせてし

まった。自分がムキになってしまっていたことに気がついてクラスのみんなに軽く弁解し、リュウノスケくんに向き直る。
「生半可なんかじゃない」
今度は小さな声で言った。リュウノスケくんは少し驚いたように目を見開き、それから、僕の言葉に耳を傾けてくれた。
「そう。君の言うとおり。はじめは誰でもよかったんだ。君の言ったことはほとんどあたってる。でも、今は彼女に興味があるんだ。好きとか嫌いとか僕にはまだよくわからない。でも、彼女とあって話してみたいし友達にだってなってみたい。この気持ちは嘘じゃない。だから、少しの間、またてつだってくれないか」
クラスの信用とかはもうどうでもいいっておもえた。もうどうでもいいことなのに、さっきまで「信用」なんて言葉を言い訳に、自分の中のもやもやした気持ちからの行動をどうにか正当化していた。でも、リュウノスケくんのおかげでそのもやもやがはれた気がした。
リュウノスケくんは、また少しだけ驚いた顔を見せて、そのあと少し考えた後に、やっぱり
「うん。わかった」
と言ってくれた。
「ありがとう」

第四幕　留紅草（後書き）

次の話からテンポが少し変わります。

第五幕　翁草（上）（前書き）

第五幕　翁草（上）

「私のこと、嫌いになっちゃったんでしょ」
誰もいなくなった音楽教室に、感情を押し殺したような声が響く。先ほどまで授業だったこの教室は、少しこもった熱気と、急に人のはけた寂しさに包まれていた。
ボクは彼女に「うん」とは言わなかった。嫌いではなかったから。
「わかってたよ」
何も言わないでいると、彼女の口からから言葉が生まれる。そう、感情に任せて、生まれてくる。ひとこと、ふたこと。
そうやって、何でもかんでも、何の根拠もないのにわかったような口ぶりでまくしたてるんだ。女って言うのはそういう生き物なのだろうか。
「　　」
ボクが何か言うと、彼女の顔からは青ざめた炎が消え、一気ぐしゃぐしゃになり、最後には泣きながら音楽室を出て行った。
なんて言ったのかは忘れてしまった。あの娘の美しい顔を赤くて醜い化け物みたいにしてしまった言葉。思い出そうとも思わない。
女性の泣く顔はとても厭(いや)だ。ひどく感情的で、ヒステリックで、泣けばわかってくれると思っているようで。傲慢の塊のように思えてさえしまう。初めてそう思ったのは、母親の泣くのを見たときだ。
「わかってたよ」なんて偉そうなことというなら、最後くらい笑ってくれればいいのに。
女って言うのはわからない。

「…ん」
窓から優しく風が流れてくる。その風の中に緑色といったらいいのか、草木の香りを感じてボクはかすかに目を開けた。机に伏していても感じることのできたその強い香りは、昨日の雨のせいでいつ

もより際立つ。
…ああ、嫌な夢だった。
ボクは浅い眠りから目を覚まして、まぶたをこすった。起き上がる一瞬、軽いだるさを感じたが、いざ起きてみると午前中の授業づかれだとかが一気に吹っ飛んだように感じられてスッキリとした気分になる。
今は昼休み。
周囲を見渡すと、いつものように教室でふたり、ひなとレンが机をあわせて遊んでいた。
陽光だけで、人口の光が全く灯されていない昼の教室。外の光と教室の中の影が対照的で、室内はわりと冷たい印象を受ける。
しかし、季節は初夏である。
あれから既に一ヶ月がたとうとしていた。
おっと、わるい。ボクはリュウノスケ。今日もライタのせいでここを動けないで居るかわいそうな少年だ。
ライタがキョウカという女の子にアプローチを続けて、はや一ヶ月。
あいつがボクに、「恋をしてしまった」と打ち明けてから一ヶ月。
その「恋」とやらが始め「たてまえ」であったろうことは、なんとなく気がついていた。
ライタはよく考えて行動するくせに、わずか一歩のところで詰めが甘い。たぶん自尊心が強すぎるために自分自身を客観視できないからだろう。
目的を掲げて、その時点で「始まり」「見通し」「結果」のすべて考えてしまう。そこまではよく考えているといえる。しかし、状況というものはいつも自分が思っているようにうまくはいかないのだ。「線」のように見通すのではなく、「面」を捉えるように変わり行く状況を観察し続け、重要な「点」を逃さないように臨機応変に行動する。そういうスタンスが正しいと思っている。
どうやらライタは思い通りに行かないと自分でも予想外の行動をと

ってしまうらしい。あいつをたとえて言うなら度胸試しで崖から海に飛び降りる勇気はあるが、落ちていく恐怖を考えていなくて目を瞑ってるうちに木に引っかかってその場から動けなくなる…みたいな。自分で言っててよくわからなくなってきた・・・。

でもそんな感じ。見切り発射したはいいもののあたって砕ける勇気がないのだ。

そしてもうひとついってやるなら、実際に行動するのがとても下手だ。ライタの行動、言動は自分のしようとしていることが複雑になればなるほど、露骨にその性質を出してしまう。もっと違った表現とか、態度とかをとったなら、自分の思ってることを隠しながらも相手を利用できるかもしれない。しかし、直接的な表現や、態度をとってしまうから少し考えれば悟られてしまう。

だから、あいつの行動の端々から何を思っているのかということが簡単に推測できてしまう。と、いっても今のところ気がついているのはボクだけだろうけど。

それが良しとでたのか、悪しとでたのかあいつ自身しかわからないわけだが、ライタは紆余曲折を経て当初の目的を忘れて本当にキョウカという娘に恋をしてしまったらしい。

本人曰く「探究心」らしいが、それは多分違う。僕はよく知っている。これは「恋」というヤツだ。

ライタに協力し続けているボクだが、何故今日も教室の自分の席に取り残されているのかという話はおいておいて、あいつがいかにして一ヶ月すごしてきたのかを思い出してみようと思う。

クラスの一部で、ライタとキョウカが怪しい仲であるということがうわさになろうとした三週間前、ボクはライタにえらそうにに説教をくれてやった。

ほんの一週間前に振られた男の口からよくそんな言葉が、といいたくなるような歯が浮くセリフに自分でも驚きはしたが、思ったこ

とを言ってやるとあいつは素直に納得してくれた。ボクが正しい確証なんてもちろんどこにもない。そうであるというのに、馬鹿みたいに言うことを聞いているように見えたライタであったが、ソレまでの反応とは違い目に強い意志を感じたので、ボクはもう少し（ライタに付き合い始めて今日で三週間になるけど）力になってやることにした。

「この三週間で何が起きたか。」であるが、まあ、ひどいものだった。

作戦コード１．　ほんのり自分をキョウカに意識させる作戦

この作戦は、キョウカのクラスである１組にライタが赴いて、近くの友達と他愛ない話をすることによって、とりあえずライタを視界に入れる。少しでもライタという人間を意識させようというとても地味な作戦であった。

はじめ実行して失敗した「友達の友達」作戦とどっこいどっこいだが、ボク的にもわるい作戦だとは思わなかった。

結果

キョウカは全く気にとめていなかった。

一組のクラスにいっても、昼は旧講義棟に行っていていないし、授業の合間の休み時間は時間があまりに短すぎた。

しかし、行動しなければ今にも体の内側からはじけ飛んでしまいそうな今のライタは好機を狙うなどということはできない。

毎回の休み時間に教室に押しかけていっては、せっせとコミニュケーション。

一組のやつらの中に「なぜ、わざわざたいして親しくもないたクラスの人間がきて、どうでもいい話をして帰っていくのか？」という疑問を生んでしまった。

結果、ライタはクラスのに居場所がないんじゃないのか？というウワサが広まり、ライタは一組のやつらから同情の目で見られるようになってしまった。

…。…．ということで失敗。

もう少し直接的なほうがいいと考えたために次に練られた作戦は、作戦コード2．　チラッ、チラッとキョウカのほうを見て偶然に目が会うことを目的とした作戦

目が合えば嫌でも意識してしまうだろう。この作戦の強みはそこだけじゃない。ライタの「とりあえず何でも試してみようという」度胸さえあれば、内容がどうであれ話をするきっかけにもなる。

チラッ（偶然目が合う）

「あ、キミは、キョウカさんだっけ？そういえば先日は申し訳なかったね。え？あっは、忘れちゃったのかい？まあ無理もないね、僕はキミと今日始めて話をするわけだからね。レンちゃんに、キミと話せるようにたのんだライタだ。よろしく。え…？なんで話したかったかって？それはね、キミがうつくしすぎるからさ！ボクはそう、春の香りに誘われたミツバチのように。キミを求めてしまったんだ！」

甘い展開である。

この作戦立案に当たって、シュミレーションをした僕らであったが、あまりの完成度の高さにふたりでほくそえんでしまったものだ。

この作戦は確かに地味である。しかし、大きな可能性を秘めたこの作戦は、ボク的にもわるい作戦だとは思わなかった。

結果

彼女は全く気にとめていなかった。
まず、誤算だったことがキョウカとその友達の性質であった。
キョウカは限られた5～6人としか遊ばず、その友達が集まると即固有結界を作ってしまう。
すると周囲が目に入らなくなってしまうらしい。魔女たちがサバト（集会）をするわけではないのだから、もっと外の世界に目を向けてもいいんじゃないかと思ったりしたが、それはそれで楽しくやってる証拠なのかもしれない。

それでも、一度だけ目が合うことがあった。
場所は廊下。時は授業間休み。
キョウカはツンと胸を張って、モデルみたいに姿勢よく歩いていた。すれ違う4歩くらい手前。ボクは目が合うのを確認して、小声でライタに話しかける。
「おい。チャンスだろ？はなしかけろよ」
しかしライタはそのまま直進し、壁にぶつかりそうになったところでやっと停止。赤く染まった頬を隠すようにぼそぼそとつぶやく。
「彼女は大切なものを盗んでいきました」
「…は？おまえ半径1メートル以内にさえ近づいてなかったろ」
「わたしのこころです」
「・・・。…はいはい」
目が合っただけでこれとは。
ということで失敗。

もっと、思い切った作戦のほうがいいと思い考え出されたのが、
作戦コード3．　偶然をよそおって廊下の角でぶつかる作戦
これならライタも逃げられまい。育ちがいいというのもあって、あいつは見かけによらずジェントルマンだ。ぶつかったら例えわざ

とであったとしても女性に気を遣うはずだ。まさに背水の陣。
きっかけなんて些細なものでいい。
「あ、ごめん。ぶつかっちゃった…たてる？　」
でも、
「いってぇ…ぶつかってくんなよ！前見て歩け！　」
でも、
「ぶつかってきたのはそっちでしょっ？！　」
でも、
「立って歩け　前へ進め　あんたには立派な足がついてるじゃないか」
でもなんでもいいのだ。
会話が成立すればそこにきっかけが生まれる。あとはライタしだい。
無理やりだが、こういうベタなシュチュエーションは漫画やアニメで出会いのテンプレートにもなっている（らしい）。
ボク的にもわるい作戦だとは思わなかった。

結果
どこにでもあるT字の廊下。入念なセッティングと、主人公を除いた行き当たりばったりのキャスティング。天気はあいにくの曇り。風は低く唸り、空は今にも泣き出しそうである。ついに実現したその瞬間。ライタはゆっくりと踏み出し、角に行き着く。二人が足を踏み出し・・・。
そして、間一髪、キョウカをよけた。
「おい！！！！なにしてんだよ！　」
彼女がいなくなったあと、ボクはライタに半ば怒鳴りつけるみたいに問いただした。
「僕にはできない！」
「え？　」
ライタはわなわなと肩を揺らし、悔しそうにこぶしをにぎりなが

ら泣いていた。
「僕にはできないっ！彼女を傷つけるなんて！僕が奪われるのはいい。こころだろうが、身体だろうが、給食のデザートだろうがなんだってもっていくといいっっ！彼女になら…しかしっ！彼女の笑顔を奪う権利は僕にはないっ」
「…はいはい」
…はいはい。
ジェントルマンどうこうのはなしではなく。結局ライタはキョウカの前じゃ崖から飛び降りる勇気もなくなるのであった。こうなってしまっては、ライタという人間の強みはほぼゼロになってしまう。

そこで編み出されたのが、今も続いている作戦である。

作戦コード４．　昼休みに思い切って、中庭に突入。告白。

なんでこのシンプルな答えに、こんなにも時間をかけてしまったのか。はじめからこれでよかったのではないだろうか？
これならば、男と女の一騎打ち。好きだといえれば、勝つにしろ負けるにしろ、このながきにわたる戦いは終わる。人脈どうこうといったようなものをつかって、わざわざ面倒な策を考えなくてもいい。ライタという一人の漢（オトコ）の勝負である。
作戦を考えてきたボクにも、ここまでたどり着くのに多くの時間がかかってしまったことについては非がある。
しかし、これで最後にしようじゃあないか！

暫定結果
今までの結果を話そう。「今も続いている」からお分かりのとおり。今まで２週間ばかり続いているこの作戦だがすべて失敗している。

目を合わせただけでのぼせてしまうライタがはじめから告白だなんてハードルが高すぎたというのは承知していたことだった。しかし、人は学び、いつしか乗り越えるのだ。何十回でも試すといい。

今日は記念すべき１０回目だ。

４回目まではボクもついていったのだが、

「リュウノスケくんがいると、きっとキミに甘えてしまうからね。だから、教室でまっていてくれないか？」

と、言われ今日もあいつを待ちぼうけである。

正直、ボクもライタと作戦をたてて実行する（のはライタだけど）のは楽しかった。しかし、この１週間弱はこのとおりお昼休みがお昼寝タイムとなっている。待っているだけというのは結構つらいものだ。たまにはみんなとサッカーやドッヂボールがしたい。

そんなことを思いながら視線を外に移す。校庭は教室の窓とは逆の方向にあった。しかし、外が恋しいことには変わりない。窓の奥で静かにゆれる緑色。そんな平和な景色を見ていると、また眠気が襲ってきたので教室の中に視線を移す。

教室の中では、やはりひなとレンが遊んでいる。

…そうだ。あの出来事を忘れていた。その日からライタがすこしおかしなことを言うようになった、あの出来事を。

あれはボクが中庭についていかなくなる前。ライタの三回目の告白のときだった。

第五幕　翁草（上）（後書き）

引き続き翁草（中）に続きます。

第六幕　翁草（中）

あれはボクが中庭についていかなくなる前。ライタの三回目の告白のときだった。

ボクとライタは前日、前々日と同じく立ち入り禁止の旧校舎の中庭におもむいた。しかし、いつもは木陰で戯れているはずの女の子たちはどこにもおらず、大きな欅がだけがゆっさりと風になびいているだけだった。

どこか悲しげな、木の根元にふたりで近づいてみる。

ひどく簡単に形容するなら、美しい空間。

ゆっくりと流れる時間。やさしく吹くかぜ。こぼれてゆれる木漏れ日。ひんやりした木の幹。葉の重なる静かな旋律。その、忘れ去られた楽園は、美しいものだけを閉じ込めた翠の箱庭のようであった。

その中心に来てボクは、はじめて理解かる。彼女たちが、「立ち入り禁止」のテープをまたいでまでここに来る理由。

いつもは彼女たちを包むその空間を侵してしまったことに、なぜか小さな背徳心を感じてしまう。ボクなんかがいていい場所でない気がして、何故だか落ち着かない気持ちになってしまった。

「おい。ライタ。今日は来てないんじゃないか？」

そんなこと、見れば分かる。居心地の悪さ（不自然な居心地の良さ）をどうにかして紛らわすために、適当に並べた言葉だ。問題は、なんでこんなに天気のいい日にこの場所を訪れないのかということだった。

しかし、ライタは何も反応しない。気になって顔を見ると、

「っはあ。っっはあ…ここで、毎日、彼女が…」

なんかすごく危ない顔で荒い息をしていた。

というのは、きっと事情を知らない第三者が持つ感想だ。

フォローを入れてやるなら、「ライタは顔を赤らめて、節目がちに照れていた」といったところだ。
いつもキョウカが遊んでいるところに来るだけでコレとは、重症である。
でも、そんなライタのヤツがすこしうらやましいなんてのは、口が裂けてもいえない。

ほぼ、放心状態のライタを正気に戻して教室に連れ帰るみちのり。先ほどの木造旧講義棟とは対照的に、現代建築と、奇抜なデザイン性、白を基調とした新校舎の廊下を歩く。外では、みんなのはしゃぐ声や、大縄跳びをまわす掛け声などが聞こえてくる。せっかく時間が空いたから、校庭でやってるサッカーに混ぜてもらおうぜ。などという話の流れを完全に無視してライタは、
「なんで今日はいなかったんだろう？」
などと、いまさらな話題を振ってくる。ボクは一通り考えて、それらしい答えを見つけ出す。
「たまたま、今日はキョウカさんが休みだったんだろ。きっと。だからみんな集まらなかったんじゃないのか？」

「ちがう！」

教室の手前まで差し掛かったところで、なにやら怒鳴り声が聞こえてきた。
僕の意見に誰か意義を唱えたものかと、一瞬驚いたが、そういうわけではなかった。
しかし、たしかにボクの推測は間違っていた。なぜなら、怒鳴り声の主はキョウカ本人であったからだ。
そのあとに、ここからでは十分に聞き取れないような女子の小さな声が聞こえて、それからキョウカが教室から飛び出してきた。

ボクは位置的に大丈夫だったが、ライタは急に廊下に飛び出してきたキョウカにぶつかりそうになってしまう。
が、やはり紙一重でよけた。
ライタの運動神経は他と比べてもかなりいいほうだ。だから、よけることもできれば、よける一拍前にキョウカを確認してわざとぶつかることだってできるはずだ。しかし、ライタはやはりよけた。作戦を引きずるつもりはなかったが、みすみすチャンスを逃すとは・・・。まあ、ライタらしいといえばそうなのだけど。
教室に入ってみると、そこにはこのごろ見知った顔のヤツと、いつもどおり、ひなとレンがいた。
キョウカが怒鳴って出て行ってしまった所為か、昼下がりの明るい教室は背景とは対照的に妙な緊張感に包まれている。
このごろ見知ったやつらはキョウカの取り巻きであった。しかし、全員が気まずそうに下を向いたまま黙っている。
おかしいのはそいつらだけではない。
レンはいつもの笑顔ではなく、困ったようにひなを見つめておろおろしていた。ひなはいつもより血色がいいようにも見える。そして、心なしか肩で息をしているようにも見えた。
一度訪れてしまった静けさの所為で誰も口を開こうとしない。
ボクが何があったのかを聞こうとして、口を開こうとしたとき、
「おい…」
ライタが先に言葉を口にする。どこか震えたような声で、何かにおびえるように。
「彼女さっき、泣いてなかったか」
その疑問に対して誰も口を開こうとしない。ひなは、じっとライタのほうを見つめているだけ。レンは何かいいたそうだったけどやはり黙っている。女の子たちは相変わらず下を向いたままだ。泣いていたかどうかボクには分からなかったが、どうやらそういった状況であったことはこの場の反応から推測できる。
「誰が、泣かせたんだ？なんで…」

状況がどうであったのか、この場にいなかったボクらが知る良しもない。しかし、ライタの大切な人であるキョウカが泣いて出て行ったという事実はゆるぎない。

いつもはよく考えるライタであったがこのごろは調子がおかしい。ボクは、恋に盲目なライタが「キョウカがよってたかって誰かにいじめられた」なんていう偏った考えにいたって暴走してしまうんじゃないかと心配してしまう。

「泣かせたのはたぶんわたし（ボクにいえたことじゃないけど）」

口を開いたのはひなであった。いつもの寝ぼけたみたいな半眼をまっすぐライタの方に向けてしっかりと「わたしが泣かせた」と口にしたのだ。

ライタは目を見開き、驚きをあらわにした。意外であったのはこの場に元からいたレンも多少驚いた顔をしていたことであった。多分レンは途中から入ってきたのだろう。きっと教室で起こったすべての状況を知らないのだ。だから、いい加減なことを言うわけにも行かず黙っていたということか。

「なんで…そんなっ！」

「あなたの気持ちはわかるわ」

つかみ掛かりそうな勢いで「なぜ？」と問うたライタを、何の物怖じもせずひなは見つめていた。

「あなたの気持ちはわかるわ。大切な人が傷つくのはとってもくるしい。自分が傷つくときはぎゅっと胸が痛くなるけど、大切な人が傷ついてもそれは他人のモノだから、その人の痛みをかんじることはできない。でも、きっと痛いんだろうなって思っていても立ってもいられなくなる。それはあなたが優しいから。だから、私が許せない。でも、あの娘が泣いていたのが全部私のせいだとして、あなたは私をしかりつけたあとに、どうするというの？彼女の前に連れて行って謝らせる？それとも、キミの敵は僕がたおしたよなんていってほめてもらうの？本当に彼女のことが大切なら、ちがうでしょ。『わたし』っていう乗り越えなきゃならないハードルを低くしてあ

げるんじゃなくて、『彼女』自信が飛べるように寄り添ってあげなきゃならないんじゃない？」

ああ、なんてこいつはお人良しなんだろう。ボクはひながつい先日、ライタに「好きな人がいる」といわれたときに「おうえんしてる」と返したことを思い出していた。ひなは、この状況をわざと利用しようとしているのだ。

はたから見れば、笑えるワンシーンだ。なんてったって、自分を叱りにきた人をえらそうな口ぶりで諭(さと)した上に、「自分が泣かせたが、お前が私をしかっても生産性がないから、さっさと消えろ」と言っているようにも聞こえる。

しかし、きっとライタがそうであると信じているであろう「状況」からして間違っているのだ。

ボクは状況をすべて把握しているわけではない。しかし、ひながすべて悪いなどということはきっとないのだろうとおもう。むしろキョウカがただ返り討ちになっただけなのかもしれない。それを思わせるように、キョウカの取り巻きの女の子たちは、ひなが「全部私のせいだとして」といった瞬間に気まずそうに目配せをしたり、驚いた顔でひなを見ていたりした。

さらに、ライタはキョウカが好きだという事実とライタ自身の性格。

そんなこちらの事情まですべて把握した上で、ひなは自分を敵役にして一芝居撃ったというわけだ。何がいいたいかというと、

「彼女、ひとりで泣いているんじゃない？おいかけなくていいの？」

つまりは、ライタにキョウカを慰めさせて救いの王子様にするって作戦だ。本人は王子様になれるなんて考えはないのかもしれない。きっとライタの中にあるのは、あの場所で泣いているキョウカの顔とそれをどうにかしたいという気持ちだけだ。

ライタは、この状況では悪ものであるはずのひなから諭を受け本

気で悩んでいた。
このときばかりは、変に勘違いしないで素直にバカなままでいてくれ。それがお前のためだ。
ライタは大きく深呼吸して息を止めたあと、顔が真っ赤になったくらいでプハァッと肺の中の息を解き放ち、それから、
「おぼえてろよ！」
などといって、走り去っていった。さっきのは何の儀式であったのだろう。彼にしかわからない。
再び静寂を取り戻した教室。ライタがいなくなっただけで、数刻前とたいして代わり映えのない空間。
「おまえ、やさしいんだな」
教室に取り残されたボクは、ライタにかわってひなに礼をいう。ひなは少し目を横に移し。
「おもったことをいっただけ」
一言だけ、そういった。

ボクもあの教室でじっとしていられる空気ではなかったので、ライタを追いかける。走っていったためにライタの姿は既に廊下になかったが、行くところなどというものはかなり限定される．つまりキョウカが行きそうな場所。ライタだってすぐにキョウカを追いかけたわけではないのだから今のボクと同じ状況であったわけだ。ライタが既に廊下に姿のないキョウカがいると思った場所。ボクの頭の中ではそのふたつが見事に符合した。
ボクは割りと急いで中庭までかけていく。
中庭の前、意味をなさなくなった開けっ放しのドアの前に、ライタは立ち尽くしていた。
もしかしたら、キョウカと話をしている最中かもしれないと思って声をかけずに近づく。しかし、その必要はなかった。
「彼女、ここにはきてないのか 」

上気した顔で少しだけ息を切らせ、ライタはひとりつぶやく。
そこにキョウカはいなかった。つい数分前と同じ景色だけが広がり、林のほうから吹いた風だけが熱くなったボクらの額(ひたい)を洗う。

そのあとも、ボクらは学校中いたるところを探したが、キョウカは結局どこにも見つからず、話はその翌日のことになる。

次の日、ボクらがキョウカを見たのは廊下であった。いつものように代わり映えなくツンと胸を張って姿勢よく歩くキョウカは、まるで媚びることを知らないねこのようでもあった。
前日と代わり映えのない姿にライタは「なんで」と一言。
確かに、立ち直りが早いという意味では驚くべきことだ。しかし、そう何日もうじうじしているヤツもすくないだろう。ライタはたぶん、キョウカがもっと打たれ弱いと思ったのかもしれない。そして、これは同時にライタが「キョウカを守ってあげたい。だから、キョウカはか弱くあってほしい」という、男の子らしい願望であったのかもしれない。

さらに驚くべきは、キョウカとひながばったり廊下で会ってしまったときだ。
出くわしたふたりは、まるで約束していたかのように2メートルほど離れてとまり、無言で向き合う。
キョウカは一度目の端を尖らせて敵視しているような態度をとる。あわや、修羅場かと思いきや、
「ごきげんよう。ひなさん」
そう口にした。ひなは動じることなく、それが礼儀とでも言うようにスカートの端をちょこんと押さえて、
「ごきげんよう。キョウカちゃん」
と静かに言う。続けて、ふたりは懐かしい間柄の友人のように少

しぎこちなく話し始めた。
「昨日はひどいこと言ってごめんなさい」
「べっ…べつに気にしてなどいませんわ！こちらこそ…あなたにひどいこと言って…もうしわけ…なかったというか…なんと言うか…」
だんだん声のトーンが低くなっていくキョウカは、どこかはすかしがっているようにも見える。
「あなたの友達のほうはどう？わたしのいったこと、気にしてなかった？」
「わたくしには分かりかねる質問ですわ。でも、たぶん」
「そう」
「…ありが・・・とう」
遠くから見ていて聞き取りずらかったが、確かにキョウカはひなにそういったように聞こえた。これには、ボクも驚きだ。ライタとともにキョウカのことを調べたから、キョウカという人間が大体どんな人物であるのかというのはわかっている。少し怪しげなお嬢様口調とプライドの高さ。一部の友人意外にはあまり社交的ではなく、かといって内向的というわけでもない。そんな彼女から、昨日喧嘩して泣かせられた人間に感謝を口にしたのだ。
キョウカはしきりに制服のブレザーの端をいじりながら、口をとがらせうつむいている。
「え？」
「なっ…ななな、なんでもないですわ！べっ、べつに私のおもいあがりとか…なんとかを叱ってくださったことに感謝なんてこれっぽっちもしてないんですからね！そう…元から思い上がってなど、いなかったですしっ！？・・・」
「え？」
「むっきーーーーー。そうやって、わたくしを炊きつけて！」
キョウカとひなはふたりとも柄にもなく騒いで、しかしどこか楽しそうであった。いつもはたいして表情を表に出さないひなも、ど

こかにこやかだ。
「じゃあ、ひとりごと。これからキョウカちゃんって娘に言うはずだった、もう私だけのひとりごと。『べつにあなたのためにやってあげたんじゃないんだからね。わたしは自分を守るためにただ必死に言葉をならべただけなんだからね。ありがとうなんていわれる資格はわたしにはないんだからね。こちらこそ。わざわざ話しかけてきてくれてありがとう』」
「・・・っ／／／／」
キョウカは面食らったみたいに目を見開いて、顔を真っ赤にした。
「じゃあね」といって、ひなは１８０度回転しその場を去ろうとする。顔を真っ赤にしたままのキョウカはぎゅっと手を握り締めて
「まって！」と叫んだ。
「？」
立ち止まったひなは疑問符を浮かべて、キョウカをじっとみつめた。これから起こることに、廊下の角の陰から見守る（のぞく）ボクらも固唾を呑む。
「あの…ともだちになってくれ…ません…こと？」
「なんで？」
「え？なんでって―」
キョウカの顔にさす小さな絶望。無理もないだろう。あのプライドの高そうなお嬢様がわざわざ頭を下げたのに、その話をけったのだ。何故だかボクまで悲しい気分になってくる。
「まだ、ともだちじゃなかったの？」
その言葉にキョウカはハッと顔を上げ何かいいたそうにしたあと、また顔を赤くして下を向いた。なぜだろう、今、ボクの顔も赤い気がする。
「またね」
そういって、ひなは自分の教室の入っていった。
ライタは「なんで」と、またつぶやいていた。

昼休みがくる。ボクとライタは今日も一緒に中庭へ行くことにした。学校に来て、今日初めてライタと会話したとき「今日は中庭にはいないんじゃないか」とふたりで話していたのだが、朝から大変なものを見せられた所為で「いない」などと断定はできなくなっていた。いいや、むしろはじめはキョウカは今日休むのではないかというところまで考えていた。

こうしてボクらは今日も旧校舎の中庭に行く。初夏の旧校舎は、いつにもましてどこか美しさを感じさせた。約一ヶ月前に着てから、何度か訪れることになったこの場所。はじめてきたときには気がつかなかったが、何度か来るうちにさまざまな発見をするようになった。旧校舎はところどころ窓が割れていたり、鍵が効かなくなって開きっぱなしのドアがあったりと、聞くにも増してひどいスピードで老朽化していた。使われなくなって2年の歳月が立つこの旧校舎であったが、教室の中には猫の親子が住んでいたり、破られたスピーカーの網の向こうには鳥が巣くっていたり。窓際の柱の根にはエノコログサが生えていたり、トイレは使われていないはずであるのにもかかわらず綺麗な水が出て、右から三番目の個室からは何者かの気配を感じたり。たくさんの生き物が校舎へと侵入していた。

余談であるが、トイレを含め校舎は使われなくなってから水を止めているらしい。なぜ水が出るのかなどということは、考えないことにした。

人のすまなくなった家屋の老朽化が激しいと聞くが、こういった動物もその一端を担っているに違いない。なぜ（ボクは望んでるわけではないが）取り壊さないのか分からない状況であったが、そこは大人の事情というヤツなのだろうか？

春らしい春が始まったばかりの一ヶ月前と比べて、だいぶ騒がしくなった校舎は今日も昨日と同じ。ボクらはいつもの場所に着く。

昨日と同じ中庭の風景のさきには、意外にもいつものような楽し

そうなキョウカたちの笑顔があった。
朝の廊下で見たものが衝撃的過ぎて、たいして驚きもせず、予想の範囲内のことであったが、見ていてやはり小さな違和感を感じる。
ライタにはこの話をしていないのだが、ボクは独自に昨日何があったかをレンに聞いていた。どうやら、昨日のケンカのはじまりはキョウカがひなの大切な友達のひとりを馬鹿にしたことらしい。
キョウカだって頭ごなしに悪口を言い散らすような性格ではない。きっと、何か別の目的があってひなに話しかけて、話の流れでそのようになってしまったのだろう。ボク自信としては、学校でレン以外と遊んでいるところを見たことがないひなの「友達」というやつが少し気になったりするのだが。しかし、まあなんであれ「大切な誰か」が否定されたり、傷つくのを見るのはいい気分ではないだろう。ここにもひとり、同じような理由で昨日学校中を走り回ったやつがいるし。
それで、あの無口な割りにいうときははっきりというひながキョウカの痛いところをついて返り討ちにしたってわけだ。
ボクたちが教室に着いたとき、キョウカはひとりで廊下に出て行った。ということは、取り巻きの女の子たちはひなとケンカするに当たってたいした戦力にならなかったようだ。
あの場しか見ていないボクがあれこれ言うのもおかしな話だけど、すぐにキョウカを追いかけもせず、ひなに言い返しもしなかった女の子たちは、一見キョウカを見捨てたとも思えた。だからボクは楽しそうにキョウカと遊んでいる女の子たちを見て小さな違和感を感じたのだ。
まあ、こうして現在楽しくおしゃべりしているのだから、きっとあのあとに「なにか」あったのだろう。
何にせよ、キョウカがひとりでしょぼくれてるなんていう予想が外れてよかった。
「なんだよ。何の心配もなかったな。ライタ今日こそ頑張れよ」
深く考えるのを病やめて、ボクはいつもどおり友人の背中を押し

てやる。しかし、ライタはなぜか固まったまま動かなかった。
「なんで」
そして、さっきと同じように一言「なんで」とつぶやいた。
「さっきからどうした？『なんで』って」
大方予想は付く。ライタもボクと同じ考えなのだろう。昨日泣いていたキョウカが何故、いつもどおりの笑顔をこんなにも早く取り戻しているのか。
「昨日彼女は泣いていた。それは、とっても悲しいことがあったのだろう。じゃあ、なんで今日ひなちゃんとあんなふうに楽しげに話してるんだい？なんで、いつもとかわりない、凛々しい顔で廊下を歩いているんだい？」
ああ、やっぱりか。ボクも女の子というものを理解しているわけではないし、昨日あったすべてのことを知っているわけではない。でも、個人差はあるにしろ人は立ち直ることができるし、けんかすれば仲直りすることだってある。
たまたまキョウカという人間の立ち直りが早いだけであったということではないのだろうか。
いつもどおりに戻ったというなら、お前もいつもどおり、どうやって告白できるかまえむきにかんがえろよな！そういうもんじゃないか？
ボクがライタにそう言おうとした時、
「なんで。なんで今日の彼女たちは、昨日よりもずっと楽しそうなんだい？」
ボクはライタの話がまだ続いていたことに気がついていなかった。
「…いつもどおりじゃないか？」
思わずボクは反論してしまう。目の前にあるのは、いつもと変わりない風景だ。
ライタは欅の木の下をじっと見たまま動かない。
「ちがうよ。昨日よりもずっとずっとたのしそうだ」
ボクにはわからない彼女たちの表情の変化が、ライタには分かっ

てしまっているようだった。いつも、彼女たちを本気でみているライタだからわかるのだろう。
「なんというか、昨日よりもずっと自然で、心から笑っている様で。うらやましくなるくらいに楽しそうなんだ」
いつものように熱っぽく大げさに語るでもなく、ただ淡々と話すライタは、また「なんで」とつぶやく。
ボクには見えない特別な笑顔。
ライタが見ているのはきっと、片思いにありがちな幻想なんかじゃないのだろう。
ボクもそれが見たくて思わず目をこすってしまう。でも、みえなかった。
わかりきっていた。
キョウカのことを本気で思っているからこそ見えたのであろうその幸せな表情は、どれだけ高名な画家でも表現することのできないうつくしいものなのだろう。ゴッホのように本能的で、モネのように清楚で、喜多川歌麿のように扇情的でバッハのように壮大で、ヴィスコンティのようになまなましく、ジョルジオのような矛盾を孕んだ…言うに尽くすことのできない美しい表情。
目の前にあるのに、ボクには届かない。やはり、少しうらやましくなる。
「明日からひとりでここにくるよ。きっと、ボクのこの疑問にもキミは答えをくれるのだろう。でも、この答えはじぶんでだしたい。間違ってもいいんだ。わかったらきっと、キョウカちゃんに告白できそうな気がするんだ。でも、君に甘えるわけには行かない。リュウノスケくんがそばにいると、すぐに甘えてしまいそうだ。だから、教室で待っていてくれないか？」
ライタの顔は真剣だった。このボクがうらやましく思ってしまうくらいに。
「君なら答えをくれる」…？
ライタの言葉をもう一度おもいかえしてみる。

ボクにはわからないよ。答えだって出せない。
見えてすらいないんだから。

「…スケ…ん。リュウノスケくん！おきてくれ！　」
「…ん」
気がついたら、また眠っていたようだ。昼休みに二度寝してしまうなんて小学生にあるまじき行為ではないだろうか。
…これはまた、嫌な夢だった。
夢の内容は、ついこの間のことだ。夢は記憶の整理のことを言うらしいと本で読んだことがある。寝ている間に、今日あったことを総復習するだけでなく、日ごろストレスに感じていることを夢に見て、そのストレスを解消するという。どういったらそのようにストレスが消えてなくなる（？）のか、ボクには分からない。しかし、これも本で聞きかじった知識なのだけど、夢の内容は覚えていてもいいことはないらしい。それが何故なのか、という重要な部分を忘れてしまったのだけど、あまり見ていて楽しくなかったし忘れることにした。
そんなことを考えつつ、呼ばれる方向を見てみると、ほこりまみれのライタが立っていた。
そのツンツン頭になぜか細い木片を大量に紛れ込ませて、紺色の制服も今は驚きの白さである。
はじめ目が合ったとき、得体の知れない化け物が目の前にいるので夢の続きかとも思ったが、違うようであった。
「お前、どうしたの？そのかっこう」
「いや、ついさっきさ…その柄にもなく八つ当たりして柱を殴りつけたら思いのほかもろくて…こぶしが貫通してしまってだね？柱に上半身を突っ込んでしまったんだよ。いやあ、八つ当たりなんてなれないことはするもんじゃあないねっ！あはははっ！」
「八つ当たりってことは…おまえ、今日も告白できなかったのか？
」

小さな静寂、言ってはならないことを口にしてしまったときのような気まずさ。
今日も外では小鳥が平和を謳(うた)う。
「…っ。…ほえ？　」
ばっくれやがった。
「ほえ？じゃねーだろぉぉぉぉぉぁ！ってめ―！いつまでボクをここに縛り付けておくつもりだ！？はやいトコいうこと言ってスッキリしろ」
ボクは感極まってライタにヘッドロックをかます。ほこりが付くのだってかまうもんか。こいつはお仕置きが必要だ。
「ギブッ！ギーブッ！！暴力反対だよリュウノスケくん。憎悪は新たな憎悪の糧にしかならない。目を覚ませ」
「うるせー！昼まっからボクをお昼寝させているのはどこのどいつだ？おかげでこのごろ夜に寝られなくて困ってるんだよ！　」
「ちょっとまってくれ・・・。ボクは寝てくれなんて一言も言っていないよ？寝ることを選んだのは君じゃないか」
「ライタ。このぽかぽか陽気で暖かな日陰のした、ボーっとしてたらどうなる？ボーっとしてなくてもいいんだ。たとえば、そう誰かを待ってるとか」
「ねむくなるね」
「ボクをまたせてるのは？　」
再び訪れる静寂。今日も外ではクラスメイトの元気なあそび声。
「…。…ほえ？」
「ほえ？じゃねー！！！！！　」
「うるさアアアアアあああああああああああああい！」
三度訪れた静寂。
言い合っているボクらを注意したのは、ひなと遊んでいたレンであった。
学校中に響くのではないかとも思われるその声で、ボクらは驚きいいうのをやめていた。

「もうっ！ふたりともケンカはよくないんだよっ！するなら外でやって！」
『はい』
ふたり仲良く返事をする。レンは腰にてお当て「よしよし」といったあと、机に座りなおして、何もなかったようにひなと二人で遊び出した。
「彼女はいい風紀委員になるだろう」
そうつぶやいたライタにボクは「そうだな」とうなずいた。
ボクらは再度話しを続ける。
「おまえさー。このまま卒業とかしちゃうんじゃないの？」
「うん…」
ライタはうつむき、空気が抜けたかのようにしょぼくれる。しかし、すぐに顔を上げて自分に「そんなのではいかん！」と言い聞かせるようにブンブンと顔を横に振った。
「言い訳がましいのは分かってるんだ。でもさ、なんで彼女たちがあんなに楽しそうに笑うようになったのかっていう答えが出ないと、一歩も前に進めないでいるボクが居る。今日であの日から1週間近くたつけど、恥ずかしい話まったく答えなんて出ない」
「…」
思ったよりも事態は深刻そうだ。
「でもさ、僕なりに彼女に気持ちを伝える方法は考えたんだっ！なずけて、ロマンチック大作戦！女の子ってさ、やっぱりロマンチックな言葉に弱いんじゃないかなっておもって。ホラ！これ！台本考えてきたんだよね」
ライタは原稿用紙四枚にも及ぶその超大作をポケットの中からとりだし、ボクに見せ付ける。急に作ったような笑顔になったライタは、どこかカラ元気でみていて痛々しい。
だから、
「ライタ」
こんなときだからこそ友達がでしゃばらなければならないんじゃ

ないのか？
「なんだい？　」
「お前は、自分で答えを出すって言ったけど、このままで答えなんて出るのか？」
「それは、だすよ」
「無理だよ」
ライタの顔がつめたく翳（かげ）る。ボクの言葉に怒るのか？失望しているのか？そのどちらだっていい。面と向かって、このくらいのこと言えないようじゃ友達じゃない。ボクはライタを信じているからこそ、ライタの顔色なんて一切気にしない。
…」
ライタは無言であった。自分でも心のどこかに何かがひっかかっていることに気がついているのだろう。
「お前はその『答え』って言うのを隠れ蓑にして告白する勇気のない自分を正当化してるだけだ。『答えが出ないから一歩も踏み出せない』？『言い訳がましいのは分かってる』？はっ！バカか？それ自体が完璧なる、何の正当性もないいいわけだ。なんで『答え』が出ないから告白できないのか説明してみろ。答えなんてはじめから出す気もない。無論、このままじゃお前は一生自分に都合のいい言い訳ばかりして告白なんてできない」
「それは…」
ああ。反論したいのは分かる。でも、うまく言えないことだってわかってるさ。ライタはきっと、本気で悩んでいたんだろう。でも、出すことのできない答えをずっと追いかけるのは一生その先に進めないことを意味している。あえて厳しいことを言わなければ状況を打開することなんてできない。
ボクにはお前の見ていた風景を見ることができなかったし、その先にある『答え』なんて予想も付かない。でも、迷ってるお前に助言してやるくらいはできるんだぜ？
「ひとりで成し遂げる必要なんてあるのか？お前はいつの間にか全

部自分でやろうって考えるようになってしまっているよ。あれから、たいして相談もしなくなったじゃないか。1週間たって忘れちまったのか？ボクはライタに告白を手伝ってくれって言われたんだぞ。最後まで付き合ってやる。すこしはボクを頼ったらどうだ？　」

ボクの話を聞き終わって、ライタは少し悩んだあと、ライタは言葉を発した。意外だったのは思いのほか感情的でないことだ。怒ると思ったのだが。

「いまさらだけど。、それじゃ僕の本当の気持ちということになるのかな？全て他人の言ったとおりに動くなんてことはないけど、僕はきっとキミの言葉に納得したら大体そのとおりに動くし、思ってしまう。それは、僕の思ってたことなのかな。僕の力だけで告白できてこそ本当の気持ちが伝わるんじゃないかと思う」

ボクはため息をつく。恋とは盲目というが、今の自分のことも見えなくなるとは、やはり深刻だ。

ボクはライタが手に持ったままの告白の台本を指差した。

「じゃあ、聞くけど。そこに書いてあるロマンチックな言葉は本当にお前の気持ちなのか。飾り立てたムードとか、きゅんとくる言葉を女の子は夢見るのかもしれない。でも、その夢は告白の瞬間だけだろ？限りなく嘘に近い脚色されすぎた『本当の気持ち』よりも、お前の言うとおりライタの本当の気持ちをぶつければいいとボクも思うよ」

「…」

「これがボクの考えだ。お前はさっき『キミ（ボク）の言葉に納得したら』って言ったよな。そのとおり。これを聞いた後に最終的に納得するのはライタ自信だ。ボクの考えが正しいにしろ、そうでないにしろそれは参考でしかないんだから、答えを出しているのはいつもおまえ自身だ。最後まで付き合ってやるから、がんばろうぜ？

」

いってて恥ずかしくなるような言葉の数々だ。ライタのことをおおげさだと笑えないな。

まあ、大切な人のためだったら、つい熱くなってみんな饒舌になってしまうのかもしれない。
ライタはもうしわけなさそうに口を開いた。
「またキミの力を借りても、いいのだろうか」
「何をいまさら。友達だろ」
「ありがとう」
これで、昼休み教室に縛られなくてよくなりそうだ。
「全部終わってからいえよ」
ボクが最後にそういって、言い合いは終わった。
結構大きな声で言い合っていたのだが、ひなもレンも注意してこなかった。
昼休みはあと5分ある。さあ、作戦会議だ。

第六幕　翁草（中）（後書き）

今回は長いですが、読んでくださってありがとうございます。
第一章とつながってます。

第七幕　翁草（下）

「参謀長。して、この布陣だがどうみる？　」
「はっ。地形を生かしたゲリラ戦が望ましいかと」
「うむ。僕…いや、わしもそう思っていた」
「ゲリラ？そんなまどろっこしいことなんかしなくていいんじゃないかなっ！敵の戦力は高が知れているし、相手の兵は脆弱なものばかりだよっ。それにこちらは精鋭ぞろい、一転突破すれば目標の首なんて一瞬にしてとれるよっ」
「なにいってるのレン。戦うのはライタくんひとりよ」
教室の窓側、前の席を陣取って作戦会議は始まった。
今は、本来なら授業中である。

昼休み残り5分と迫った教室は、教室に帰ってくる生徒たちで少しずつ騒がしくなっていた。
ボクらはひとしきり言い合ったあと、これからのことを話し合った。
「さっそくだけど、リュウノスケくん。僕には何がたりない？」
「情報だな。お前はなんでってばっかり言うけど、ろくに調べもしないで自分の頭だけで答えを出そうとしてただろう？」
「うぅ・・・たしかに」
「あの日になにがあったのかをひなさんに聞こう、とりあえず『なんで』の答えがほしいんだろ？使えるものは使わないとな」
こうしてボクらはひなたちの遊んでいる窓際まで足を運んだ。二人は授業が始まるので机を元通りに戻そうとしているところだった。
「ねえ、ひなちゃん」

「？」
1週間たって忘れていたが、ひなとキョウカが言い合った日からライタとひなは一度も話していない。
キョウカが教室を出て行ったとき、ライタとひなも気まずい雰囲気になってしまったからだろう。好きな人を泣かせた相手。つい先日言い合った相手に頭を下げなければならないというのは少し勇気がいる。
ライタが話しかける直前まで、ボクはどうなることかとひやひやした。また言い合いになってしまっては元も子もない。しかし、ライタなら何事もなかったように話しかけられるだろう。いつもどおりに。
というボクの予想を裏切るのがライタである。
「あの…ひなちゃん？」
ライタはひどくもうしわけなさそうにひなに話しかけた。
「？」
隣にいたレンも頭の上に疑問符を浮かべていた。
いつもどおりだったのはひなのほうであった。ひなは一週間前の出来事をまったく気にしていないようだ。
「あの…さ。ごめんなさい」
「？」
ひなはいつもの半眼でライタの方を見ている。その表情は薄くて察するのが難しいけど、いきなり謝られて困惑しているようだ。ボクも困惑していた。何故謝っているのか。ひなと言い合った時だってライタはやられてばかりであったのに。
「あのね。じつは、わかってたんだ。一週間前のあの日にひなちゃんが僕にさせたかったこと。あんな遠回りな言い方して僕の告白を手伝ってくれたんだよね？それだというのに、ひなちゃんを大声で怒鳴ってしまった。ボクは卑怯者だ。お父様に知られたらきっと、太陽系の外まで殴り飛ばされる」
「そう。わたしは別に気にしてないわ」

「……」
ライタは反省しているようにうつむいて無言のままだ。
「思ったことをいっただけだもの。わたしにその気があってもなくても、あなたが気がついても、気がつかなくてもその場の状況を利用できたのはあなたの判断。わたしはライタくんを責めるつもりもないし、その権利もない」
「そっか、わかった」
「うん」
立ち直りの早いライタであったが、ひなは別段気にしているようでもなく返事を返す。話は本題へと移る。
「それでね、今日は聞きたいことがあってきたんだ」
ひなは承知したように「うん」とつぶやく。
「キミにキョウカちゃんが泣かされた次の日から、キョウカちゃんはとても元気だった。元気なんてものじゃない、前の日よりもっと魅力的になった。僕は彼女のことを見てきたから分かるんだけど、キョウカちゃんはそんなに打たれ強いほうじゃないと思う。なんで、そうなったのかひなちゃんは分かる？」
ひなは少し目を伏せて考えるようなしぐさをする。
「まだ、告白はしてないの？」
「うん」
ひなは少し驚いたように目をしばたかせた。ひなはどうやらライタが一週間前に告白したものと思っていたらしい。
「じゃあ、本人に聞いたら？わたしはそこまで知らないわ」
「え？」
…え？ひなが言ったことにボクも耳を疑う。ライタが勇気のない意気地なしのどうしようもないヤツだとわかってしまったにしても、話を投げてしまうのはさすがにひどい。
ライタはこぶしを握り締め、うつむいたままプルプルと震えていた。
まずいっ！怒ってはならないぞ、ライタ！

「その手があったか！」
ライタはスッキリした顔でそのように言った。
「つまり、告白のときに聞けばいいってことだね？」
「そう」
ボクの早とちりだったらしい。ひなは一番の打開策を打ち出した。なんてスマートなんだと、改めて驚嘆する。
「これから告白するんでしょ？」
ひながライタに問う。
「え？うん」
「てつだう」
「いいのかい？！」
「なになにっ！？楽しいことしてるみたいだねっ！わたしも手伝っていいかなっ」
机を戻し耳を傾けているだけだったレンも話に参入してきた。これは渡りに船というところだ。戦力が倍になった。しかし、ここで既に五分が立ってしまっていた。いい流れだったのだが、作戦会議は次回に持ち越しか。ボクが小さくつぶやくと、
「次の時間は自習だよっ」
レンがそういう。どうやら天は我らに味方しているようだ。

自習時間が始まる。本来なら算数の時間だが、どうやら用事で担任の先生が午後からいないらしい。監督の先生は授業のはじめに来たきり、どこへともなく消えていった。うちのクラスは授業中に騒ぐ人間があまりいないため、たまに様子を見に来る程度でよいと考えられているらしい。
確かに騒ぐやつはいない。しかし、みんなまじめに勉強しているわけがない。小さな声でしゃべったり、お絵かきしたり。
よって、先生にさえ見つからなければ机をあわせて作戦会議などたやすいのである。

始まった作戦会議の議題は「どうやって告白するか」である。
今までの、「昼休みに突撃する」作戦は周囲にキョウカの友達がいるためライタにはハードルが高すぎることをレンから指摘された。
よって、「昼休みに告白」。しかし、「キョウカをひとりにする」というシュチュエーションをつくるということが決定された。
次に、どのようにひとりにするかである。この会議はひどく盛り上がった（悪い意味で）。

ひなは客員参謀。
レンは軍務総長。
作戦参謀長はボク、リュウノスケ。
ライタは、「元帥」兼「鉄砲玉（一兵卒）」というよく分からない役職。
という設定で、作戦会議は進んだ。

旧講義棟の簡単な地図を自由帖に書いて、そこにキョウカを中心とした女の子たちの名前を書いた消しゴムを並べる。キョウカの駒はなぜかライタのポケットの中に入っていた５００円玉である。
四人は一様にして眉間にしわを寄せ、机をにらむ。机を囲んでいるあたり、コックリさんでもやってるのかと疑われるようにも見えるだろうが、そんなことを気にするようなうちのクラスメイトはいない。
「参謀長。して、この布陣だがどうみる？　」
口を開いたのはライタであった。告白するのはこいつの役割であり、決定権はライタにあるから、例え兵隊でも元帥である。
「はっ。地形を生かしたゲリラ戦が望ましいかと」
ボクはライタに進言する。
「うむ。僕…いや、わしもそう思っていた」
分かっているのかわかっていないのか、大きくうなずいて応じる

ライタ。
「ゲリラ？そんなまどろっこしいことなんかしなくていいんじゃないかなっ！敵の戦力は高が知れているし、相手の兵は脆弱なものばかりだよっ。それにこちらは精鋭ぞろい、一転突破すれば目標の首なんて一瞬にしてとれるよっ」
役にはまりきっているのか過激なことをいうレン。
「なにいってるのレン。戦うのはライタくんひとりよ」
それをたしなめるひな。
作戦会議は進む。
「一転突破では、これまでと何も変わらない。ハードルが高すぎると、ボクらにそう進言したのはレン軍務総長、きみではなかったのかね？」
「ぐぬぬ。では、どうしたらいいというのだ参謀長くんっ。名案でもあるというのかいっ？ゲリラ戦といったねっ。では聞くが元帥ひとりでゲリラ戦なんてできるのかいっ？」
「むっ。では、ここはひとつ、客員参謀殿にお話を伺ってはどうか」
ボクは、ひなのほうを横目で流すように見る。
ひなは難しい顔で瞑っていた目の片方だけを開けて、「そうね…」とつぶやく。
「確かに、最終的に戦うのはライタ元帥閣下よ。でも、それまで。最終決戦（アポカリプス）までは、わたしたちにもできることができると思うの」
「うむ。わしもそう思っていた」
ライタに突っ込んでやりたかったけど、僕は黙っていた。
「というと、どういうことかなっ？」
「つまりはね、わたしはさっき『戦うのはライタくんひとり』といったけど、言っててきが付いたの。陽動で敵の数を減らすことくらいなら、わたしたちにだってできるわ。キョウカちゃんをひとりにするために、みんなで動いて敵を減らすというのはどう？」
「うむ、いい案だ」
ただ便乗するライタを小突いてやりたくなったが、我慢我慢。

「みなのもの、相違ないな？　」
ボクは一旦、この場を締める。みんなも無言でうなずいた。
「では、我らの配置を決めよう」
そういって、次の議題に移ろうとした瞬間。
「敵襲だー！！！！！」
そう口にしたのはドア側に居たクラスメイトであった。
『ハッ』
クラスメイト全員に戦慄が走る。やつが見回りに来たのだ。
ボクら生徒は一瞬にして授業の体勢に戻り算数のドリルを始める。
「うむ。二組はいつもまじめだなーウンウン。関心」
入ってきたのは監督の先生だ。しかし、その一言だけを残して教室を一回りすると、またどこかへ消えていった。
間々あって再び訪れる喧騒。作戦会議も再び幕を開かれる。

「配置」「作戦」「作戦終了時集合場所」すべてが決定し、明日、戦いは幕を開ける。
作戦コード：5「明日は咲かない今日の花」
これで最後にしよう。

第八幕　ライラック（紫）

四時間目が終わる。僕たちは号令を聞くより前に教室を抜け出し、旧校舎前で最後の確認を行う。

「今回の作戦だが、急で悪いんだがＫＴＤを導入することになった」

「ライタ元帥。それはなんでありますかっ！　」

レンちゃんはいつも元気がよくていい。そう、良くぞ聞いてくれた。僕はポケットの中から四人分のソレを出した。

「はっ！これは！！！　」

「そう。ＫＴＤ（けーたいでんわ）。これでお互いの状況が分かる」

「おい、ライタ！もし見つかったら軍法会議ものだぞ（先生に怒られる敵な意味で）！　」

「だいじょうぶ。そのときはわたしが言い訳をかんがえる」

「さっすがひな！　」

なんだかんだで、みんなノリノリだ。ここまでこられたことを心の中で一度みんなに感謝して、僕は作戦のブリーフィングを始める。

「ターゲットはキョウカちゃん。しかし、その周りに護衛が６人付いている。六人はつくしちゃん、くるみちゃん、ナズナちゃん、こぎくちゃん、しおんちゃん、ゆずちゃん。うちふたり、くるみちゃんとしおんちゃんは、僕が今から学校の方向に歩いていき、キョウカちゃんと合流する前にさりげなくクラス委員の仕事をたのむ。残る四人だが、これらは諸君に任せることになるがいいかな？　」

『さーいえっさー』

響くみんなの掛け声。

「うむ。しおんちゃんとナズナちゃんは、レンちゃんと同じ幼稚園だったね？僕が告白する戸尾分間だけ、昔の思い出話でもして足止めしてくれ」

「さーいえっさーっ」

「うむ。つくしちゃんは図書委員だったね。昨日、持ち出し禁止の

本をひなちゃんが無断で借りて言ったというプロパガンダ（？）を流しておいた。今日の図書館当番は運よくつくしちゃんだ。内気だけど規則にはきびしい娘だから必ず注意しに来るはずだ。そこを本を持っているふりをして、返すのを嫌がる演技をしてくれ」
「さーいえっさー」
「うむ。あとは最近キョウカちゃんたちと遊ぶようになったこぎくちゃんだけど、リュウノスケくん。この件については任せろって言われたけど、勝算はあるのかい？この娘については調べる時間がなかった。きみだけでだいじょうぶなのかい？」
「さーいえっさー。任せろ」
リュウノスケくんの目は真剣だ。大丈夫だろう。
「うむ。では作戦を開始する」
僕は話し終わった後、配置に付こうとするリュウノスケくんを呼び止めた。
「リュウノスケくん」
「ん？なんだ？」
僕は彼女のために書いた告白の台本をリュウノスケくんに渡した。それは、昨日リュウノスケくんにだめだしされたものだ。
「もう僕には必要ない。でも、頑張って書いたものだから自分じゃ捨てられない。君が捨ててくれないか？」
リュウノスケくんはすこしきょとんとしたあと、「わかった」といった。
「読んでみてもいいか？」
「ええっ！！うっ…うん」
いきなりの提案に僕は驚く、リュウノスケくんは読んだ後に何をしようというんだ？ま、まさか！大笑いするつもりじゃ…！
難しい顔をしてひとしきり読み終わった後、リュウノスケくんは僕にひとこと。
「ＨＡＨＡＨＡ。これなら、大統領夫人（ファーストレディ）もイチコロさ」
褒めことば…ではなかった。きっと、皮肉っぽく「こりゃ駄目だ」

といったのだろう。わかってる。僕もあのあと読み返したが、恥ずかしくなった。ちょっとだけ、ほんのちょっとだけ、しゅん…となる僕にリュウノスケくんはもう一言。
「でも、よかったぜ。ボクはお前の告白の瞬間に立ち会わないわけだからなー」
「え？　」
「だって、ここに書いてることよりずっといいこと言うんだろ？ボクまで惚れちまったらたいへんだ」
そういってリュウノスケくんは、はにかむように微笑んだ。
「…／／／」
あまーーーい。
「がんばれよ」
僕の肩をポンとたたいて、リュウノスケくんは配置に付く。
気を取り直して、作戦開始だ。

「こちら、ｗｒｉｔｅｒ（ライター）。フェーズ1成功。直ちに所定の位置に付く」
ＫＴＤで一斉送信された内容に私は目を通す。ライタくんははじめの作戦に成功したらしい。つまり、このまま中庭に向かい、キョウカちゃんが来るのを待つということだ。
あとは私たちがいかにこの作戦を成功させるかがカギとなってくる。
私の目標はゆずちゃんとナズナちゃんだ。同じ幼稚園といえど、最近あまり話さないため話すには勇気がいる。
しかし、これも同胞のためだ…なーんてねっ。
「さてっ、一肌脱ぎますかねっ」
移動しようとしていたナズナちゃんに声をかける。多分行き先は旧校舎だろう。

「あのさー。うちのクラスの宿題で、思い出の作文を書くことになったんだけどねっ。幼稚園のころのことを書こうと思うんだっ。私たちの幼稚園ってどんなだっけ？　」
「え…っ…うーん、そうだねー」
急いではいないようだけど、中庭にまっている人がいる以上あまり言い顔はされない。これは予測の範囲内。
？…でも、ゆずちゃんがどこにも見つからない。
「あのさ、ゆずちゃんは？ゆずちゃんの話も聞きたいんだけど、今日は一緒じゃ…」
「え…あーうん。これは秘密だよ？」
ナズナちゃんはおもむろに語りだす。
「私たち、旧校舎の中庭でよく遊んでるんだけどね。ゆずちゃん今日はそこにもう行っちゃった。私がおトイレいくのまってくれてたらいいのにー」
……。
間に合わなかったかっ…。これはちょっとまずいんじゃないかなっ！
「ごめん。そこでちょっと待ってて！」
私はいそいでトイレに駆け込み、ひなにメールを打つ。

今日はわたしが一番乗り。
少女は胸躍らせて旧校舎の廊下をスキップする。こんなところを見られたら少し恥ずかしい気分になるのだろう。そう思いつつもウキウキがとまらない。
一番乗りとはそういうものではないだろうか。と、少女は自分で納得する。
クラスでもあまり目立つほうじゃないし、足だって遅い。前に出て行く勇気もない。
結果、少女はいつだった後ろに並んでいる。

だから、少女は一番というものに憧れていた。
なぜかは知らないけど、他のみんなは今日に限って係りの仕事や他の事情でいそがしい。キョウカちゃんは決まって、昼休みが始まって5分後に中庭を訪れる。
今日は神様が私にくれたごほうびなのね！
そう思うと、さらに足運びが早くになる。

しかし、ソレは突然現れた。

「…！」
誰？

少女は声にならない悲鳴を上げる。もう使われていない教室の中に誰か、いたのが目の端に映ってしまったのだ。

少女の頭をよぎるのは、この学校の怪談話。どこかは知らないが、トイレの三番目の個室。そこにはこの学校で誤って事故死してしまった子の霊がいるという。そういえば、そのトイレは今でも綺麗な水が出て…。
「…ひっ！」
気がつくと目の前はトイレ。断水しているはずのトイレの中から聞こえる水の音。
そして、トイレのほうから、まっすぐのびた足跡。サイズは、子どものものに間違いない。
いつもはみんなと一緒だから怖くない。でも、今ここには少女一人しかいないのだ。
足ががくがくと振るえ、窓から差し込む初夏の日差しが暑いくらいなのに、寒気を感じた。
もしかして、わたしのことを食べにお化けがトイレから這い出してきてる？

旧校舎に住み着いた子供の幽霊？
少女の脳裏に嫌な妄想が膨らむ。
呪うような目をした、水浸しの生徒。それが、わたしをトイレへ引き込み、食べてしまう。足の先からゆっくりと、泣き叫ぶわたしを尻目に…ぐちゃぐちゃ。

帰ろうか…でも、後ろを振り向いたらお化けがいるんじゃないだろうか。前にも進めない。後ろにも戻れない。
少女は、もう一番乗りのことなどどうでもよくなっていた。

ちゃぽん。

しずくの滴る音。

いやだっ、ここにいたくない。帰ろう。
そう思って後ろを振り向こうとしたそのとき、
「動かないで」
水浸しの女の子が後ろに立っていた。

「あっ、え？ぅぁ…っんぐ…。いたい…」

水浸しの女の子は何か行っていたようだけど、少女はそれから先を覚えていない。
気がついたら少女は保健室のベットで寝ていたという。少女が先生にわたしはどこにいたのかと尋ねると、体育館の近くの外と答えた。

季節の早い日射病なのかと心配されたが、少女は安心した。
すべて悪い夢だったのだ。
そう思えた。先生のその一言までは。
「そういえば、ゆずさん。あなたの制服ぐっしょり濡れてたわよ？
」

寸劇　翁草－２－

――――キョウカさん。あなたはまるで天使の微笑で悪魔のごとく僕のハートを電撃にも勝る衝撃で奪っていきいました。それは、かの王、イスカンダルが西の大地を蹂躙するがごとく破滅的で、しかしたくましい絶望的なまでの生命の奔流がこのライタを…。…。…。

この調子で、原稿用紙４枚がきっちりと埋まっていた。
僕はライタの書いた台本をすべて読み終えて、それから言われたとおりにゴミ箱に放り投げた。破いて捨てなくても、誰もあれが告白のために用意されたものであるとは気が付かないだろう。あれでは思いも何も伝わらない。思いどころか…ちょっと怖い。
そんなことをしていると、ＫＴＤのアラームがなった。
『こちら、ｗｒｉｔｅｒ（ライター）。フェーズ１成功。直ちに所定の位置に付く』
ｗｒｉｔｅｒか。普通だな…でも、なんでボクのコードネームだけこんなにかっこ悪いんだ？　そう、決まってしまった自分のコードネームに悪態をつく。
ボクはいま、音楽室で人を待っていた。その人をここで十分足止めしなければならない。少しこもった熱気と、急に人のはけた寂しさはいつだったかのことを思い出させる。

つい昨日のことだったが、振られた前の彼女になんていったのかを思い出した。
「　　」

無意識の夢の中でさえボクが思い出せなかったその言葉。
「嫌いなんじゃなくて、興味ない」
って、いったんだ。
そういえば、それはボクの本心だった。
好きにしろ嫌いにしろ、ボクらはその「ひと」に興味を持っている。
「数直線」って知っているだろうか？
その名のとおり数値が書き記された直線で、一種のパラメータだ。習ったばかりの知識をひけらかすのは好きじゃないが、好きと嫌いはそれに似ていると思う。
０から１００までの数値が在ったとして、はじめは０でないどこかにとまってる。
好きになればプラスに傾いて、嫌いになればマイナスに傾く。
数値の軸は「興味」を表しているって考えると、好きになればなるほど興味があって、嫌いであればあるほど、興味はマイナスに傾いていく。
で、０は興味がないだ。つまり、傾きがプラスかマイナスかというのが「好き」「嫌い」なのだ。
だってそうじゃないか？嫌いで嫌いでしょうがない人のことを人は遠ざけて、もし遠ざけることができたら、最後には忘れようとしない？
でも、ボクは振られたあの娘が嫌いじゃなかった。
「わたしのこと、嫌いになっちゃたんでしょ」
嫌いじゃなかった。好きでもなかった。興味が０だったんだ。
はじめからボクは彼女自身には興味なんてなかったんだ。「恋」って言うものが何なのかを知りたくて始まったことだったんだ。
そう、ボクこそ「恋」の理由は探究心だったのだ。女の子と付き合うということを経験したいって思ったから、その彼女の告白に応

じたし、ずっと付き合っていた。
自分自身のことなのに、こんなことに気がつくのにずいぶん時間がかかってしまった。
ボクがライタと行動をともにして、分かったことなんだ。
そう、ボクはライタが恋をしているって気が付いていた。ずっと、あこがれていた、自分では手の届かなかったソレを無意識のうちに求めていたのかもしれない。
しばしの邂逅。

ボクがここに来て5分。彼女は訪れた。三組のショートヘアの女子だ。
「やあ、来てくれたんだ」
彼女は無言のまま、ボクをにらむ。
ボクはかまわず話を続ける。
「キミに大好きというのは割りと簡単だった。キミの話に付き合うのは割りと窮屈じゃなかった。キミのわがままを聞くとき、ボクの心はたやすく撫で付けられた。キミの笑顔に満足して、キミがおこると必死で謝って仲直りしようとがんばった」
「…。…」
「そういえば、キミにボクの話をしたことはあまりない。だってさ、自分の話ばかりするやつって嫌なやつだろ？ああ、そうそうボクはキミに頼みごとなんて一度もしなかったよね。だって、ほらウザがられそうで」
「…。…」
「聞きたかったんだけど、ボクはキミといるとき笑ってたっけ？ボクはキミのこと本気で怒ったときなんてあった？…思い出せなくて」
「…。…」
「キミのことなら大概のことは知ってるよ。目が合うと無条件で笑

ってしまうこと。綺麗な背中にはポツンとひとつだけ小さな黒子があること。昔の親がひどい人だったってこと。あ、そういえば、『大好き』なんて大切な言葉をボクは何百回言ってしまったんだっけ？　」

「そんなことを言うために私をここに呼んだの？　」

彼女の顔は青ざめて、怒っているのか悲しいのか分からない表情だった。

ボクは、首を横に振る。

「あのさ、ボクはキミと一緒にいたとき、『恋』っていう型を壊さないように頑張っていただけなんだ。ずっとね」

彼女をよく見ると目の端が小刻みに震え、涙を流さないようにと必死に我慢しているようだ。

「…。…だから？　」

しかし、声は落ち着いていた。ボクは少し驚く。

ボクは話を続ける。ここからが、今のボクの本当の気持ち。

「ひとってさ、その人のことを知りたいって思うから、好きな人には自分のことを知ってもらおうとするんだって」

彼女はいきなりなんだといったようにきょとんとした顔をする。

「ボクの母親はね、ボクが小さいころに出て行ったんだ。大好きだったなー母さんのこと。でも、ボクに何も言わずにいなくなっちゃって。話は変わるけど、ボクら今三年生だろ？『恋』だって興味の出てくる年頃だ。ボクは『恋』を知りたくて我慢できなくなった。そして、キミと付き合って。」

「…。…」

「でもね、最後までキミのことを好きになろうとは思えなかった。いつか裏切られてしまうんじゃないかって思うと『女性』に『恋』をするのがとても怖くなった」

「…。…」

彼女はきょとんとした顔のまま動かない。

「でもさ、ボクの親友を見てたらそれじゃいけないって思った。信

じられるか？ボクが恋を指南してやったんだよ、そいつに。…そいつはさ、何があってもくじけないし、ちょっと抜けてるけどまっすぐだし、すごく頑張りやでさ。ボクはあいつにたくさん教えてもらった」
「…。…」
「だから、教えてもらったことを生かそうと思うんだ」
ボクはライタに頑張ることを教えてもらった。他にもたくさん、教えてもらった。
「…。…」
ライタ、ボクも頑張るよ。
「小菊、キミの気持ちを考えずにあんなひどいこと言ってごめん。キミのことをもっとしりたい。こんどはボクのことだってたくさん知ってもらいたい」
小菊は泣きそうな顔を一瞬した後、あさっての方向を向いて一度涙をぬぐった。
そして、
「ぜっっっったい、いや！」
そういった。ボクはそんな風にしゃべる小菊をはじめてみたから、数秒前の彼女同様きょとんとした顔をする。

わかってたけどね。

自分なりにここまで頑張って断られると、やっぱり少しつらい。
これも因果応報かと、少しへこんでしまう。
「でも、話しかけられても無視しないから」
「え？」
小菊の話は続いていたようだった。
「たまには、一緒に帰ってあげてもいいから」
「……あははっ！」
ボクは図らずも吹き出してしまう。

そのあとすぐに、彼女は音楽室を出て行ってしまった。
怒らせてしまった？それとも、なかなおりできた？いいや、どっちでもいいや。
やっぱり女っていうのはわからない。
…ちがうな。
「やっぱりキミはわからない」
そう、もうボクしかいない音楽室でつぶやく。
はじめは誰でもよかったんだ。
はじめは。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5903z/

とある学園でのことです。

2011年12月30日00時45分発行